

山口県埋蔵文化財調査報告 第150集

# おく が はら 奥 ケ 原 遺 跡

平成3年度県営圃場整備事業に伴う発掘調査報告



1992

財団法人山口県教育財団

山口県教育委員会

表紙写真 平成2年度に発掘調査したⅡ地区の完掘写真

## 序

本県では、恵まれた自然環境の中で豊かな地域社会の実現に向けて、農業基盤整備事業等の諸施策を推進しておりますが、これらの事業に伴う開発工事からかけがえのない埋蔵文化財を保護するとともに、開発と文化財保護との調和のとれた県土づくりを行うため、財団法人山口県教育財団並びに山口県教育委員会は、圃場整備事業に係る埋蔵文化財の発掘調査を実施しています。平成2年度及び平成3年度に実施いたしました玖珂郡周東町に所在の奥ヶ原遺跡の調査では、弥生時代の壺棺墓群や主に古墳時代の竪穴住居跡などが発見され、また多くの遺物が出土し、当時の人々の生活や文化を知る上で貴重な資料を数多く得ることができました。発掘調査の成果をまとめた本書が、学術・教育の資料として利用されることはもとより、ふるさとづくりの基礎資料として広く活用されることを願うものであります。

おわりに、調査にあたりまして御指導・御協力いただきました関係各位に対し深甚なる誠意を表すものであります。

平成4年3月

(財)山口県教育財団 理事長 高山 治  
山口県教育委員会 教育長 高山 治

## 例 言

1. 本書は、財団法人山口県教育財団と山口県教育委員会とが平成2・3年度に実施した県営圃場整備事業に伴う発掘調査のうち、玖珂郡周東町大字下祖生に所在する奥ヶ原遺跡の発掘に係る「発掘調査報告書」である。
2. 調査は、財団法人山口県教育財団事務局指導主事 和田嘉之・尾崎雅一、山口県埋蔵文化財センター文化財専門委員 村岡和雄が行った。
3. 発掘調査の実施にあたっては、山口県農林部耕地課・山口県岩国土地改良事務所・玖珂郡周東町教育委員会及び地元関係各位から多大な援助・協力を得た。
4. 出土石器の石材鑑定については、山口県立山口博物館専門研究員 亀谷敦氏の御教示を得た。記して謝意を表する次第である。
5. 本書に掲載した第1図は、国土地理院発行50,000分の1の地形図「岩国」を使用した。
6. 本書に使用した方位は、すべて磁北で示し、レベルは海拔標高で表示した。
7. 本書で使用した遺構略号は次の通りである。

SB：住居 SK：土壙 ST：埋葬遺構 SD：溝状遺構 SX：不明“遺構”

8. 本書に収録した本文・実測図・写真は山口県教育委員会文化課・山口県埋蔵文化財センター職員の援助・協力を得て和田・尾崎・村岡が分担作成し、和田が編集した。

## 目 次

本文目次		表目次	
I 位置と環境	1	第1表 竪穴住居一覧表	7
II 調査の経緯と概要	2	第2表 土壙一覧表	8
III 遺構	3	第3表 埋葬遺構一覧表	10
IV 遺物	11	第4表 遺構外遺物一覧表	10
V まとめ	22	<b>図版目次</b>	
<b>挿図目次</b>		表紙	II地区完掘写真
第1図 遺跡の位置と周辺の主要遺跡分布図	1	図版1	I地区完掘写真
第2図 調査範囲図	2		III地区完掘写真
第3図 遺構配置図	折込み	図版2	竪穴住居
第4図 竪穴住居(SB-1)実測図	3		(SB-1・5・9・13・20・21)
第5図 竪穴住居(SB-5)実測図	4		壺・甕棺墓(ST-6・7)
第6図 竪穴住居(SB-13・20)実測図	5	図版3	壺・甕棺墓(ST-8・10・11・12)
第7図 竪穴住居(SB-21)実測図	6		土器出土状況
第8図 埋葬遺構・土壙実測図	9		(SX・SB-13・SK-28)
第9図 土器実測図①(住居・土壙)	12		矢板出土状況
第10図 土器実測図②(住居・土壙)	13	図版4	土器①(住居・土壙出土)
第11図 土器実測図③(遺構外遺物)	15	図版5	土器②(住居・土壙出土)
第12図 土製品・石製品実測図	17	図版6	土器③(遺構外遺物)
第13図 石製品・鉄製品実測図	18	図版7	土製品・石製品
第14図 埋葬遺構出土遺物実測図①	20	図版8	石製品・鉄製品
第15図 埋葬遺構出土遺物実測図②	21	図版9	埋葬遺構出土遺物①
第16図 鏡片実測図	23	図版10	埋葬遺構出土遺物②

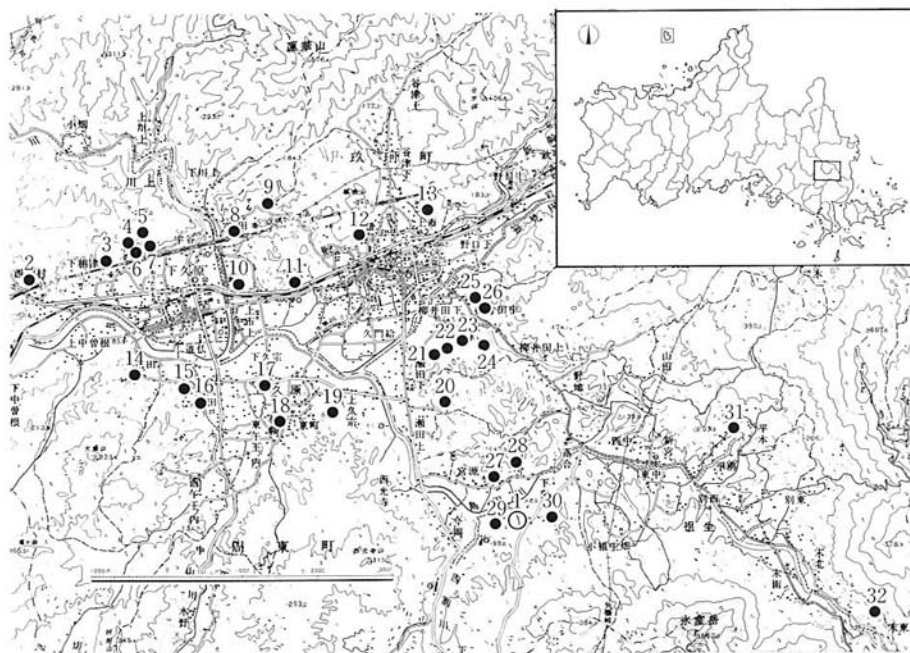
# 1. 遺跡の位置と環境

奥ヶ原遺跡のある周東町は、徳山市と岩国市のほぼ中間に位置する。蓮華山（576m）、高照寺山（645m）、氷室岳（563m）等の山々に囲まれた県内で4番目に広い玖西盆地にその中心があり、島田川を中心に中小河川が縦横に流れる自然環境に恵まれた町である。源流を高照寺山に発するその島田川が最初に出る開けた場所が本遺跡のある祖生盆地であり、氷室岳の山裾に沿うようにその流れは大きく向きを変え、盆地を出る所で四割川と合流し玖西盆地を縦断する。さらに周辺を潤しながら熊毛町・光市を通過して瀬戸内海に注いでいる。近年、山陽自動車道の開通に伴い各種工場も進出するようになったが、まだまだ玖西盆地の肥沃な土壌を生かした農業の盛んな町である。

奥ヶ原遺跡は、祖生盆地の西、島田川と四割川との合流地点近くに位置する。最近になってこの付近の発掘調査が進み、次第に昔の様子が明らかになってきた。縄文時代の遺物が発見された用田遺跡、さらに弥生時代に入れば、前期の甕が見つかった筏山遺跡をはじめ遺跡の数も多くなる。また玖西盆地縁辺部の丘陵地では、白田古墳・北方古墳等、数々の古墳が発見されており、縄文時代以来、この土地が人々の生活に適した環境であったことがわかる。

島田川が形成した谷底平野から比高にして5～6m高い山麓地に、奥ヶ原遺跡は発見された。この場所であれば、島田川の氾濫を避けることもでき、また周囲の山々での狩猟活動や低地での農耕活動を行うためにたいへん便利などころである。当時の人々がこの地に住居を構え、生活を営んでいたことが納得できる場所である。

- 1 奥ヶ原遺跡
- 2 中村遺跡
- 3 月空寺遺跡
- 4 白山遺跡
- 5 大浴遺跡
- 6 北方古墳
- 7 大元古墳
- 8 白田遺跡
- 9 白田古墳
- 10 筏山古墳
- 11 千束遺跡
- 12 植山遺跡
- 13 大伴遺跡
- 14 用田遺跡
- 15 久田遺跡
- 16 西午王ノ内遺跡



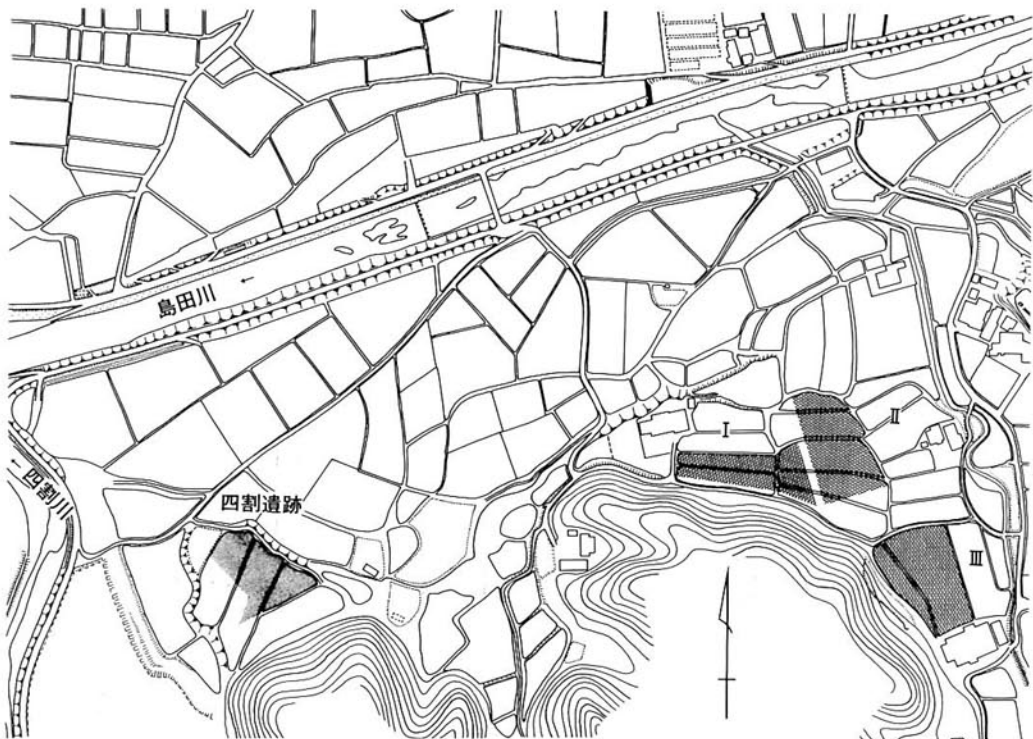
- 17 陣ヶ原遺跡
- 18 上久原遺跡
- 19 河池遺跡
- 20 寺田古墳
- 21 畑岡遺跡
- 22 上殿古墳
- 23 清水遺跡
- 24 柳井田遺跡
- 25 へころがき古墳
- 26 樋面古墳
- 27 宮源遺跡
- 28 上丈遺跡
- 29 四割遺跡
- 30 岡丈遺跡
- 31 平畑遺跡
- 32 末元遺跡

第1図 遺跡の位置と周辺の主要遺跡分布図

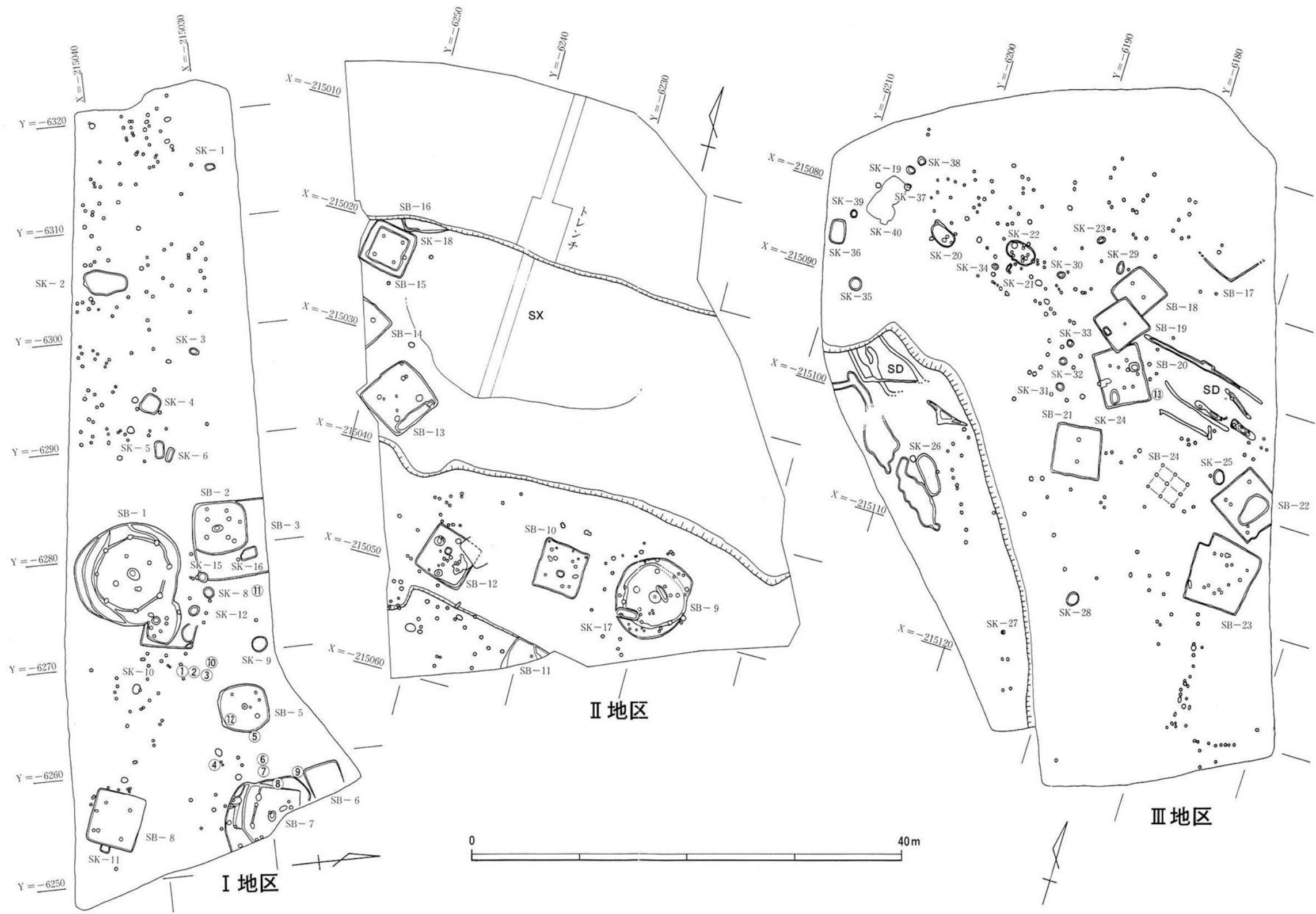
## Ⅱ. 調査に至る経緯と概要

奥ヶ原遺跡のある島田川の南側一帯は県営圃場整備下祖生地区（第1換地区）になっており事業を施工するにあたり削平が工法上避けられない範囲について埋蔵文化財の破壊損失が懸念されるため当該地域の中で地形的にみて可能性の高い山裾の水田について予察調査を行い、この結果を踏まえて山口県教育委員会では山口県農林部耕地課と協議を行い発掘調査の対象となる範囲を確認設定した。調査にあたっては財団法人山口県教育財団が山口県農林部から委託を受け、山口県教育委員会が文化庁の国庫補助を受けて、これら両機関が合同で行うこととなった。現地における地権者等の関係諸機関との打ち合わせを行った後、平成3年4月22日から発掘作業を開始した。本遺跡については平成2年度からの2年間の発掘調査であり、予察調査についてはすでに同地区に所在の『四割遺跡』の予察調査の際に2度行っているため、その結果である13箇所の試掘の結果を基に中央付近を初めとして必要と思われるところに数本のトレンチを掘り、遺構面までの深さを調べるとともに遺構の広がりや性格あるいは層序関係を把握し、さらに調査範囲を限定した。次に遺構面上に乗っている耕土・盤土等を重機によって除去した後、人力による精査を行い各遺構を検出した。その後、各遺構の状況に応じて方法を選択して発掘するとともに写真・図面等によって記録し、出土した土器や石器等の遺物を収集した。発掘調査の結果については、その概要について現地説明会を行い、平成3年8月10日にすべての調査を終了した。

(Ⅰ地区1200㎡、Ⅱ地区2300㎡、Ⅲ地区2100㎡)



第2図 調査範囲図（昨年度の調査範囲はⅡ地区）



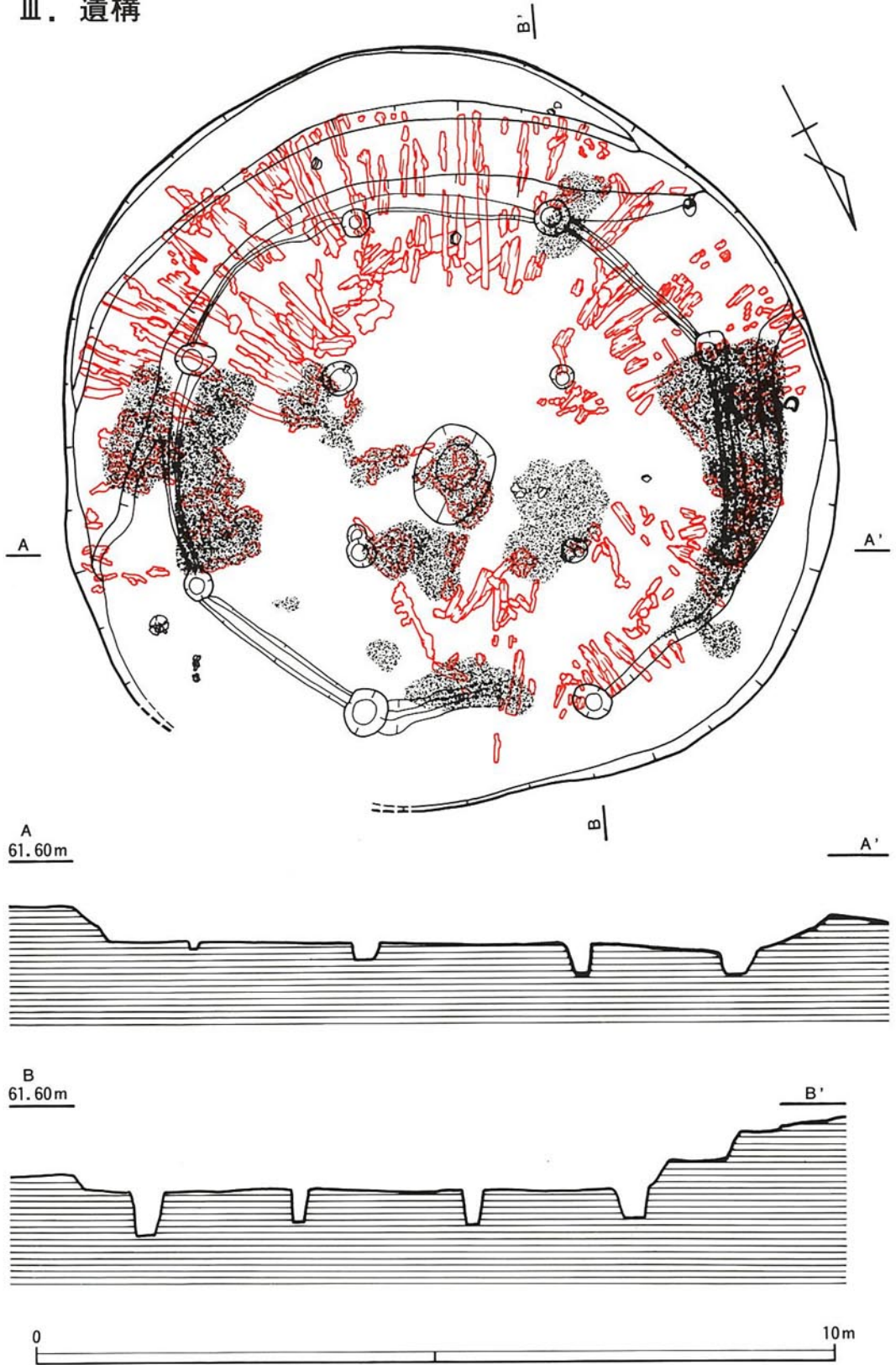
第3図 遺構配置図

①~⑩・⑫は壺甕棺墓・⑪⑬は中世墓

SB:住居 SK:土塚 ST:埋葬遺構 SD:溝状遺構 SK:不明遺構

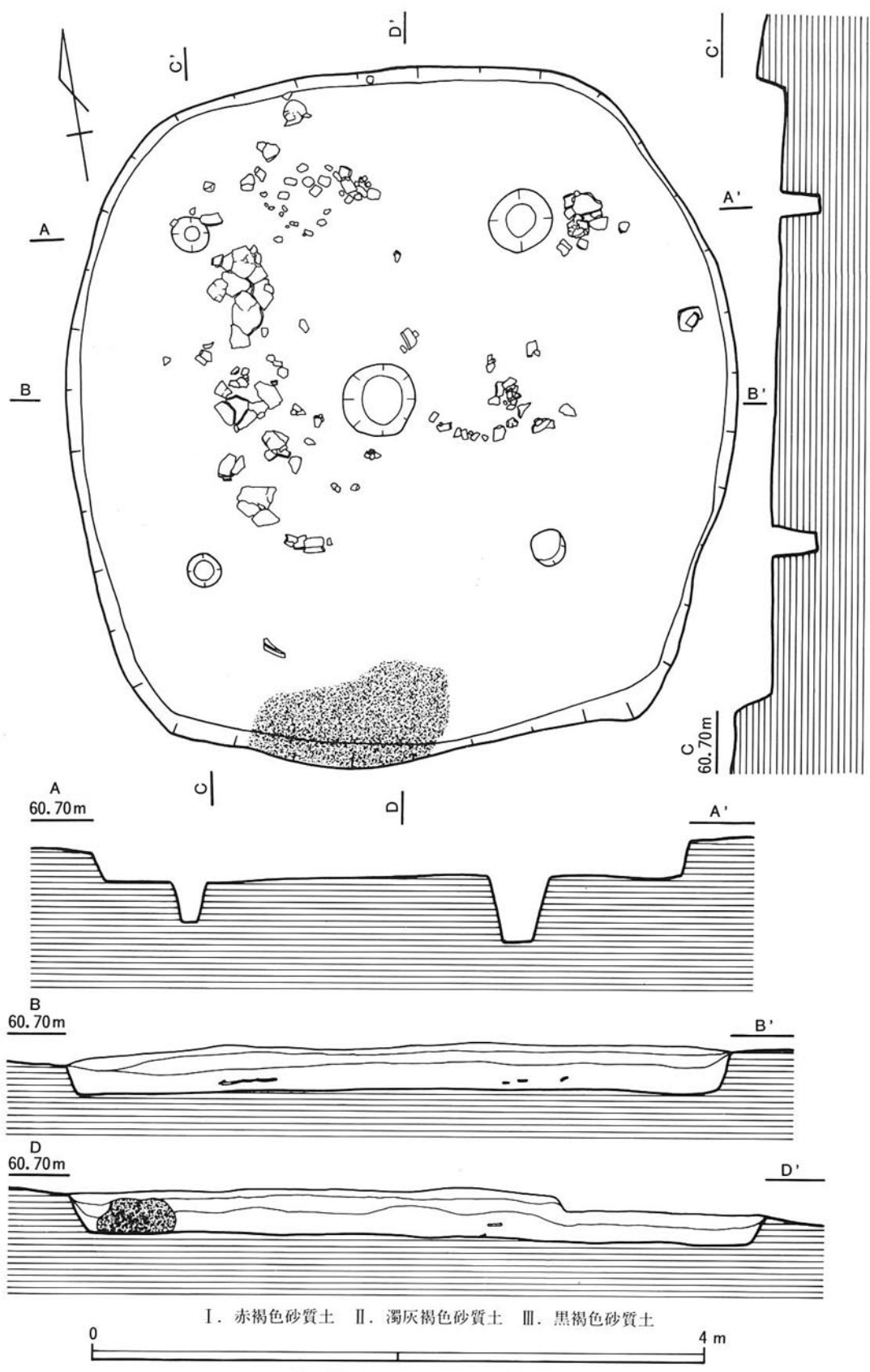


### Ⅲ. 遺構

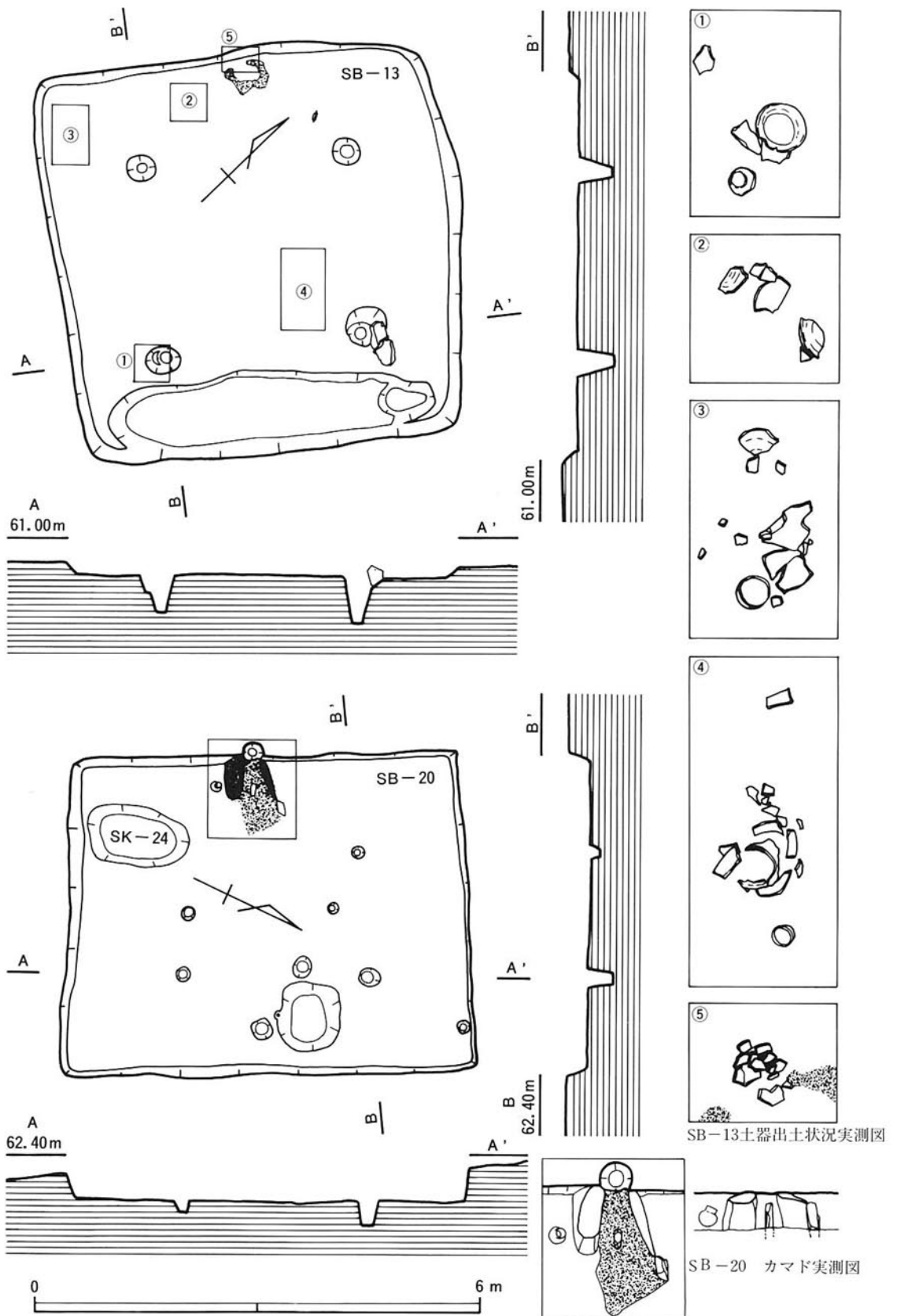


第4図 竪穴住居 (SB-1) 実測図

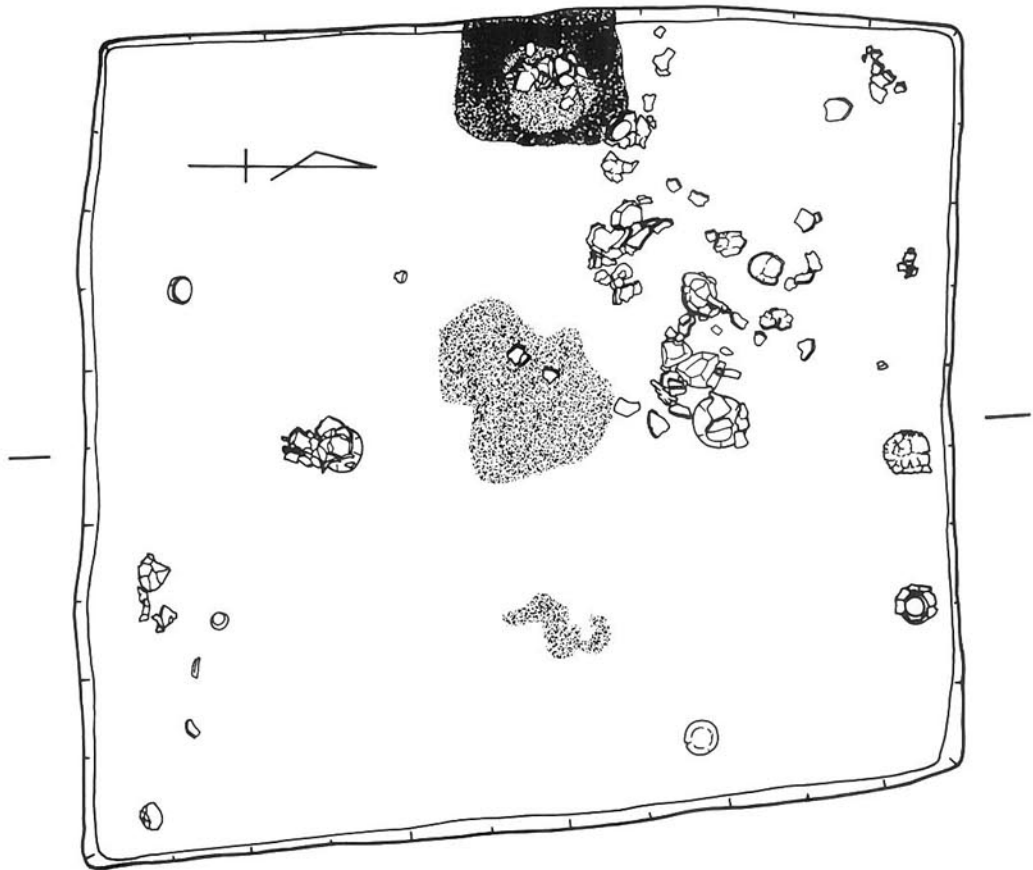




第5図 竪穴住居 (SB-5) 実測図



第6図 竪穴住居 (SB-13・20) 実測図



62.80m



0 4 m

第7図 竪穴住居 (SB-21) 実測図

以上、発見されたうち、代表的な住居跡を遺物の出土状況とともに掲載した。特に SB-1 は 10m 近い径をもち、その広い床面積を被う上部構造を支えるにふさわしい 12本の柱が整然と並ぶ住居で一面に炭化木材が横たわる焼失家屋である。中心付近には屋根材が炭化した状態で残っていた。炭化材の量が多いため、当時の家屋の上部構造を知る上で貴重な資料と言える。SB-5 は 4 本柱の隅丸方形住居で甕棺墓 ST-12 は南東の柱穴の上位に埋葬されていた。SB-13 は 4 本柱の隅丸気味の方形住居で特に多くの須恵器を出土した。SB-20 は 4 本柱の方形住居で残りの良いカマド跡が確認できた。SB-21 は 2 本柱の方形住居で SB-5 と同じく多くの土器を出土した。なお、スクリーントーンで焼土範囲を示した。

第1表 竪穴住居一覧表

(\*は推定・数値の単位はcm・遺物の数字は実測した数を表わす)

遺構番号(SB)	平面形 主柱穴	長軸 短軸 壁高	付属遺構・その他の特記事項	出土遺物(土器破片は記載しない)		
				弥生土器・土師器・須恵器・土製品・鉄器・石器・その他		
1	円形 12	930 930 76	焼失家屋。中央に炉跡。 床面に4本、壁に沿って8本の主柱穴が 整然と並び、柱穴間に溝。	弥生土器：甕4・高坏2・埴1 鏡片	打製石鏃1 石鏃1 炭化木材・屋根材	鉄鏃2 鉄鏃(部分) 不明鉄器片
2	方形 4	502 480 56	中央に楕円形の土壙。 深くしっかり残っている遺構だが、出土 遺物は少なく、カマドも不明である。	弥生土器：小型丸底壺1	砥石1 打製石鏃3 石鏃未製品・チップ	鉄鏃1
3	方形 -	634 706 43	SB-2が大きく掘り込んでいるため、 詳細は不明。 北の床面に土壙。	弥生土器：鉢1	管玉2	
4	方形 -	580 500 46	SB-1の後に掘り込まれたが、その後 多くの土壙が掘られたため詳細は不明。 鉄製品(部分)を多く出土。		骨片	鉄鏃2・施 鉄鏃(部分) 不明鉄器片
5	方形 4	450 440	南辺中央付近にカマド跡(焼土塊)。 特に北側から多くの土器が出土した。中央 にはほぼ円形の土壙がある。	弥生土器：甕1・壺1・鉢1 手捏ね土器1	打製石鏃2 砥石1 磨製石斧片	釣り針状鉄 器1
6	方形 -	320 -	しっかりした土に掘り込まれているため 掘り方は明らかであるが、調査区外には み出しているため詳細は不明。			
7	- -	- -	複数の住居(方形と円形?)が切り合っ ているが時期差があまりないせいかな平面 プランも先後関係も不明である。	弥生土器：高坏	打製石鏃 管玉1 炭化種子	鉄鏃1 鉄鏃片 不明鉄器片
8	方形 4	508 466 24	南辺の中央付近にカマド跡(焼土塊)。 東辺の中央付近を浅い焼土壙が切っ ている。北隅付近は削平により壁高はゼロ。	弥生土器：手捏ね土器1	砥石1	不明鉄器片
9	円形 4~12	770 670 40	焼失家屋。 中央に径1mの逆円錐状の炉跡。 これに接するように長円形の屋内土壙。	弥生土器：手捏ね土器1 須恵器：坏蓋1・坏身2	砥石2	施1 不明鉄器片
10	方形 *4	450 410 8	南辺中央付近にカマド跡(焼土塊)。 床面近くまで削平され、出土遺物も少 ない。	弥生土器：鉢1 須恵器：坏身1 土師器：盤1		
11	方形 -	- -	調査区外にはみ出しているために詳細は 不明。 鉄製品(部分)を多く出土。	弥生土器：器台1		不明鉄器片
12	方形 -	480 460 23	住居内に複数の土壙。南辺近くの土壙は 焼土壙。南壁に沿って周溝。多くの土器 が出土。東隅を小遺構に切られる。	弥生土器：椀1、鉢1、壺1 手捏ね土器1 高台付坏1	砥石2	
13	方形 4	550 530 16	南西辺の長さいばいに長円形の浅い土 壙。これと反対側に土器片を含んだカマ ド跡。とくに須恵器を多く出土した。	弥生土器：手捏ね土器2、甕4、 椀2 須恵器：坏蓋3、坏身5、盤1		
14	方形 *4	*480 *480 20	調査区外にはみ出しているため、全形は 明らかではないが、主柱穴及びカマド跡 は確認できた。	弥生土器：甕2、鉢1、高坏1	勾玉1	
15	方形 4	436 425 8	床面近くまで削平。壁と4本の主柱穴と の間に帯び状の浅く広い溝が掘り込ま れている。カマド跡は不明。	弥生土器：甕1		
16	方形 -	- -	田畑の造成時の段により削平。 一部に周溝。 切り取った段の断面に柱穴。			
17	方形 -	- -	平面プランは部分的にしかはっきりせず ほとんどが削平され、詳細は不明。		打製石鏃1	
18	方形 2	388 382 29	北東辺中央に土器片を含んだカマド跡。 SB-19に切られている。	弥生土器：甕2、椀1、高坏1 土師器：坏1		施
19	方形 *2	382 380 23	北西辺中央にカマド跡。 南西辺側の床面に浅い土壙。	土師器：皿1 須恵器：坏身1、甕1	水晶片 チップ	
20	方形 *4	536 428 34	SB-19に一部切られている。南西辺中 央にカマド跡があり煙道が残存。不整形 の土壙は遺構面からの掘り込み(SK-24)。	弥生土器：椀2、手捏ね土器2 小型丸底壺1 甕1		
21	方形 2	460 430 23	西辺中央にカマド跡。 多くの土器が出土。	弥生土器：甕2、甕4、高坏1、 鉢1 須恵器：坏蓋1	滑石製紡錘車1 チップ	
22	方形 4	550 480 15	南西辺中央にカマド跡。 中央付近に不整形の土壙がある。	須恵器：坏蓋1	チップ	鉄鏃1 鉄鏃1
23	方形 *4	450 520 30	カマド跡が北辺と東辺にあり、2軒の方 形住居が切りあっているが先後関係は不 明。	弥生土器：壺2、甕1	チップ	鉄鏃片 刀子1

第2表 土壙一覧表

(器種名の後の数字は実測した数を表す)

遺構 番号	平面形	規模(cm)			弥生 土器	土師 器	須恵 器	石 器	鉄 器	主 な 出 土 遺 物
		長軸	短軸	深さ						
1	長方形	95	62	32						
2	不整形	405	220	16	○	○	○			土師器：坏12、弥生土器：平底
3	楕円形	86	64	13						
4	方形	177	170	28	○	○	○			
5	長円形	162	78	22	○	○			○	弥生土器：口縁部、焼土ブロック、鉄製品：釘1他不明2
6	長円形	133	60	14		○				
7	不整形	125	45	23	○	○				炭
8	円形	97	93	44	○	○				弥生土器：平底、丹塗り土器（口縁部）片
9	楕円形	160	136	25	○	○	○			
10	楕円形	89	70	19						
11	長方形	112	80	24					○	鉄製品：茎部
12	楕円形	100	80	11	○	○	○			
13	不整形	122	80	27	○	○	○			須恵器：高坏脚部、弥生土器：口縁部、炭、骨片
14	不整形				○	○	○			
15	円形	100	100	61	○	○				弥生土器：丸底
16	方形	160	100	8						
17	長方形	228	106	15		○	○	○		土師器：坏3・皿1、須恵器：坏身1 砥石1
18	円形				○					弥生土器：高坏1
19	隅丸長方形	87	70	50	○	○	○			弥生土器：丸底・凸レンズ状の底、須恵器：坏蓋
20	長円形	256	155	22	○	○	○	○	○	弥生土器：口縁、土師器：坏7・耳杯1・須恵器：坏蓋、砥石1、鉄滓
21	長円形	76	33	28	○	○	○			
22	楕円形	285	183	11	○	○	○		○	鉄滓
23	楕円形	70	54	30	○	○				弥生土器：痕跡底部
24	楕円形	132	84	51	○	○				陶器：備前焼き底部 須恵器：坏身1
25	長円形	144	96	30	○	○	○			瓦質土器、丹塗り土器（高坏口縁部）片
26	長円形	400	150	35	○	○	○			土師器：坏1、瓦質土器、磁器
27	円形	40	40	22	○	○	○			
28	楕円形	130	104	22	○	○	○			弥生土器：壺1・高坏3・甕1・鉢1、須恵器：高坏坏部、丹塗り土器
29	楕円形	120	70	24	○	○	○			丹塗り土器片、須恵器：坏蓋、陶器片
30	楕円形	76	52	23	○	○	○			陶器片
31	円形	68	68	21						
32	円形	73	73	21						
33	円形	62	62	15						
34	楕円形	60	48	15						
35	円形	112	112	19	○					陶器：備前焼き
36	隅丸方形	225	146	23						
37	円形	57	55	49	○	○				弥生土器：壺1・水晶片
38	隅丸方形	78	72	22	○	○				
39	楕円形	73	58	19						
40	隅丸長形	190	155	-			○			須恵器：坏身1

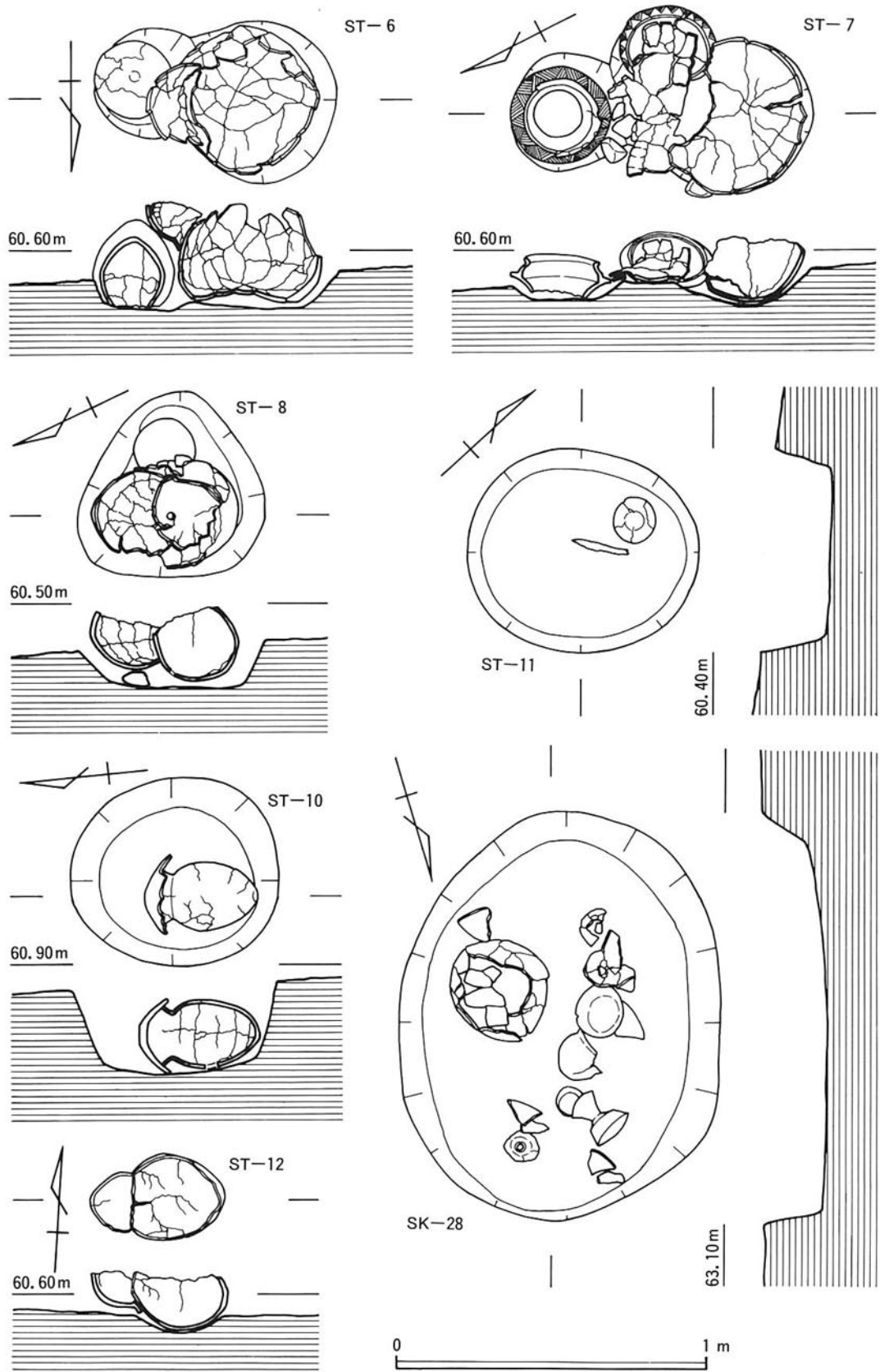
\* I地区：SB-1～8、SK-1～16

II地区：SB-9～16、SK-17・18

III地区：SB-17～23、SK-19～40

\* SDからは多種多様な土器片が、その灰色の埋土から出土しているが、すべて著しく摩滅している。

\* II地区の住穴より砥石1と銅銭とが出土した。



第8図 埋葬遺構 (ST-6 ~ 8 · 10~12) 土坑 (SK-28) 実測図



第3表 埋葬遺構一覧表

(\*は推定である。法量の単位はcm、また「器高」は底部から頸部までの高さである。)

遺構番号(ST)	長軸方位	方孔品	棺蓋	器種	器高	器種	器高	備考
1	—	—	—	—	—	—	—	削平等により破壊され、原形を止めないばかりでなく、破片も散逸しているため詳細は不明であるが、黄白色と明赤褐色の厚い胴部片を確認した。
2	N3°W	—	甕	—	32.0	*壺	—	ST-1のすぐ北に位置する「合わせ口」タイプの棺である。同様に削平等により著しく破壊されているが、状況から見て棺身はその複合口縁部を打ち欠いた遺体を収め、その口縁部を枕として棺蓋を口縁部を打ち欠かずそのまま被せて埋納している。
3	S16°E	—	—	—	—	甕	39.4 25.3	ST-2のさらに北に位置する「合わせ口」タイプの棺である。著しく散逸し、器厚が厚く棺蓋より埋葬レベルの深い棺身が辛うじて残存していたにすぎない。
4	—	—	—	—	—	—	—	墓壇は、長径65cm・短径50cm・深さ14cmの楕円形であるが、中央付近に掘り込まれた柱穴から見て、これによって破壊された可能性が極めて高い。特徴ある文様を刻んだ複合口縁部が出土した。
5	S58°E 径3.8cm 管玉	—	—	—	—	壺	22.4 45.8	SB-5のすぐ東に位置する「合わせ口」タイプの棺である。ST-3とほぼ同じ出土状況である。棺身には胴部中に径3.8cmの穿孔があるが、埋納時にはその孔を外側から土器片で塞いでいる。破片状態ではあるが管玉が内部より出土した。
6	N90°E	—	甕	—	24.7	壺	24.2 40.5	「合わせ口」タイプである。口縁部を打ち欠いた甕の中に土を詰めて逆さにして枕と同様に口縁部を打ち欠いた棺身に遺体を納めて、棺蓋を口縁部を打ち欠かずにそのまま被せて埋納している。墓壇はくぼみ程度であり、詳細は不明である。*1
7	N40°E	—	壺	—	20.0 30.0	壺	22.6 *45	「合わせ口」タイプである。共に壺であるため複合口縁部を打ち欠き、それらと石とを左右及び長軸方向に配して、棺蓋の安定をはかっている。墓壇はくぼみ程度であり、詳細は不明である。複合口縁部にはともに丁寧に文様を刻んでいる。
8	N25°E 径1.5cm	—	甕	—	21.4 22.2	壺	12.2 25.3	「合わせ口」タイプである。口縁部を打ち欠いた棺身には径1.5cmの穿孔を開けている。遺体を納めた後、打ち欠いた棺蓋を被せている。ST-6と同様に打ち欠いた甕を石と共に配して安定をはかり、さらに合わせ目を一個体分の土器片で塞いでいる。*2
9	S62°E	—	甕	—	11.6	*壺	—	墓壇は長軸90cm・短軸65cm・深さ21cmの不整形である。棺身はすでに散逸し、特徴ある複合口縁部以外は詳細は不明である。
10	N5°E 径4.6cm	—	*甕	—	—	壺	15.3 28.5	墓壇は長径68・短径60cm・深さ30cmのほぼ円形である。他の棺と違って、棺身は甕をそのまま用い、他の一個体は底部のみを蓋として利用している。また、より深く埋葬されている。棺身のほぼ中央部に楕円形の穿孔がある。
11	N42°E 坏・刀子	—	—	—	—	—	—	「中世墓」である。墓壇は長軸75cm・短軸65cm・深さ20cmのほぼ円形である。副葬品として土師器の坏と刀子とが出土した。
12	S87°E	—	甕	—	17.4 14.1	甕	17.0 30.0	SB-5の住居上に位置する「合わせ口」タイプの棺である。ST-6と同じように口縁部を打ち欠いた棺身に甕をそのまま棺蓋として被せて埋納している。
13	N21°E 坏・刀子・銭	—	—	—	—	—	—	「中世墓」である。墓壇は長軸185cm・短軸140cm・深さ15cmの不整形であるが、その床面には棺桶の後が残っており、長辺145cm・短辺50cmの長方形と確認できる。出土した坏の下から複数枚の銅銭が棺材とともに出土した。銅銭は腐食が著しく判別できない。

\*1 枕となった甕は頸部径22.0cm・器高29.8cm。

\*2 枕となった甕は法量不明。合わせ目を塞いだ甕は頸部径13.6cm・器高24.2cm。

第4表 遺構外遺物一覧表

(器種名の後の数字は実測した数を表わす)

地区	遺構表面	採集遺物	遺物包含層出土遺物
I	土師器の皿1 手捏ね2 椀1 土錘 炭化種子	打製石鏃11 石鏃1 砥石3 柱状両刃石斧1 石鏃用母岩片(姫島産黒曜石)	土師器の坏1・皿4 手捏ね1 水晶片 弥生土器：埴1・椀1 土製紡錘車1 須恵器の坏蓋2 坏身1
	管状土錘1 土玉	打製石鏃2	土師器の坏1・皿4 手捏ね1 水晶片 弥生土器：埴1・椀1 土製紡錘車1 須恵器の坏蓋2 坏身1
II	甕2 椀1 小形丸底壺1 土師器の坏1 土製管玉1 ふいこの羽口	打製石鏃2 チップ(黒曜石) 玉1 管状土錘	土師器の坏1・皿4 手捏ね1 水晶片 弥生土器：埴1・椀1 土製紡錘車1 須恵器の坏蓋2 坏身1
	甕2 椀1 小形丸底壺1 土師器の坏1 土製管玉1 ふいこの羽口	打製石鏃2 チップ(黒曜石) 玉1 管状土錘	土師器の坏1・皿4 手捏ね1 水晶片 弥生土器：埴1・椀1 土製紡錘車1 須恵器の坏蓋2 坏身1

\*SX は性格不明のため、その出土遺物はこの表中(II地区 遺物包含層出土遺物の欄)に掲載した。

## Ⅳ. 遺物

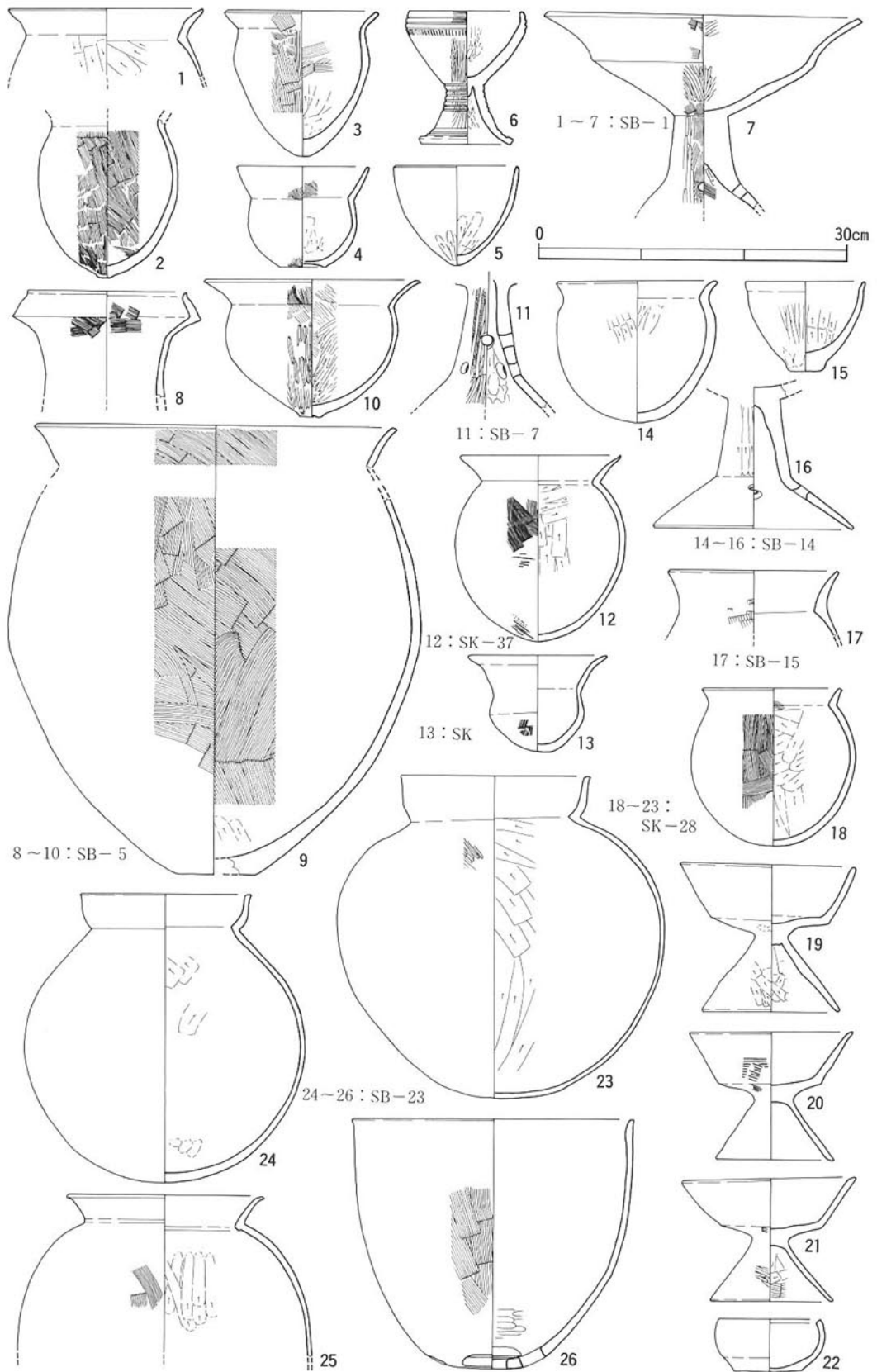
土器については、各遺構毎にまとめたものをその中の土器の年代を見ながら旧から新へ並べたものである。その他については土製品・石製品・鉄製品毎にまとめて掲載した。

### 土器①（住居・土壇）（挿図 第9図、図版4）

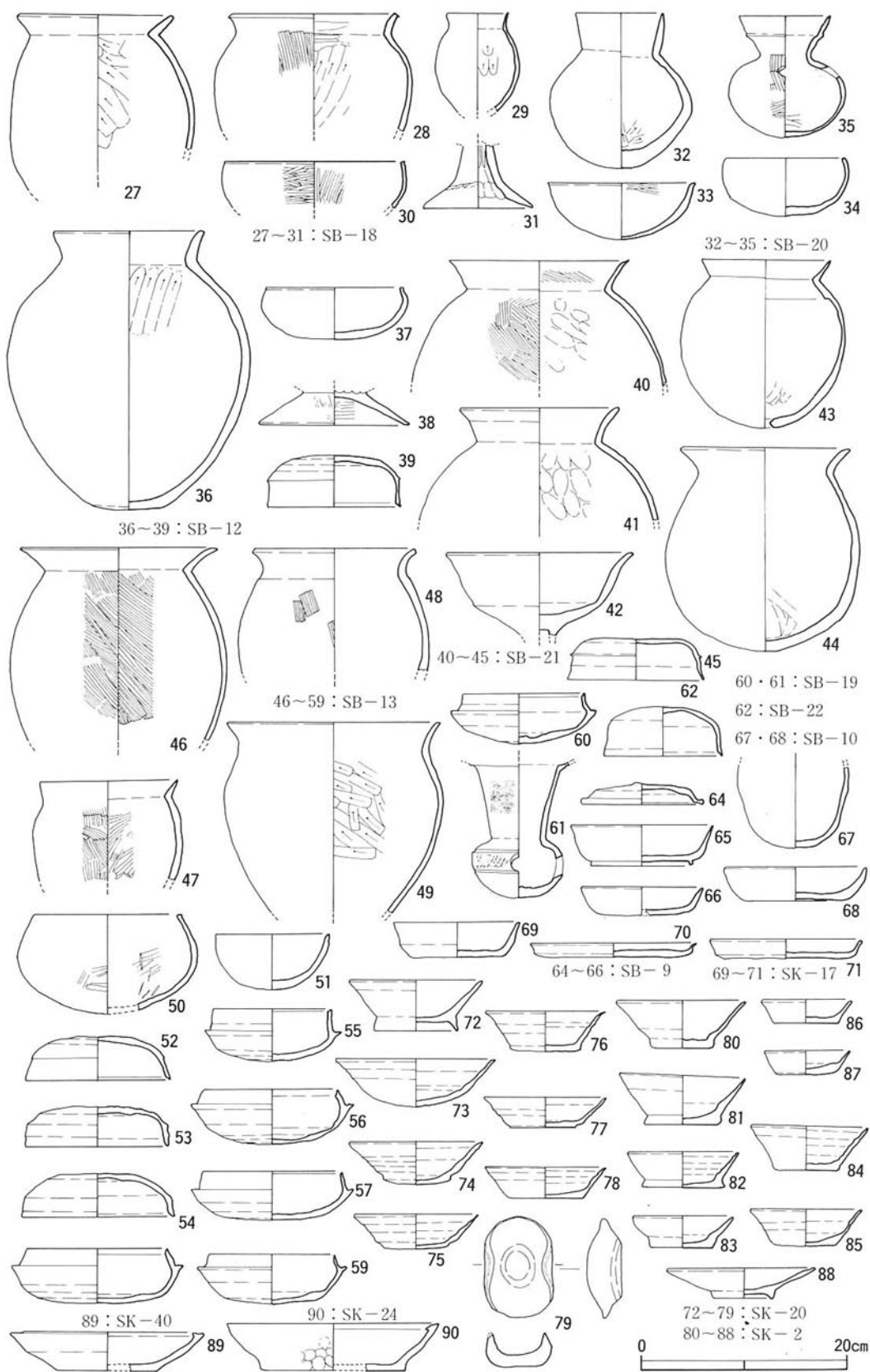
1～3は甕。2は痕跡程度の凸レンズ状の底部に上位が強く張る胴部、3は痕跡程度の平底に中位を中心に全体的に緩やかに膨らむ胴部。ともに内外面ハケ。4は小型壺で底部に穿孔。器形は埴に類似。5は尖底の鉢。甕の胴部～底部に器形が類似。6・7は高坏。6はやや厚いが全体的に丁寧整形し外面にも沈線や刺突文で装飾。7は坏部が稜からさらに大きく外反し、脚部は中位からわずかに内彎しながらさらに大きく開く。8は壺の複合口縁部。内傾する拡張部端部を外へ摘み出す。9は大型の甕。2・3の甕と口縁は類似し内外面ハケ。10は鉢。不安定な底部と上位の張る胴部に大きく開くやや長めの口縁部。11は高坏の脚部。中位から上位に90°ずらして2段8方向に穿孔。12は甕。丸底・球形の胴部にくの字形に外反する口縁部。外面はハケ。前述の甕と異なり内面がケズリ。13は埴。丸底に不釣り合いなほど長い口縁部が大きく外反。14は甕。丸底・球形の厚い胴部に短い口縁部が外反。外面は丁寧なナデ。15は甕。平底で口縁部がわずかに反る以外は5の器形に類似。16は高坏の脚部。7に類似。17は甕の口縁部。1に類似。18は甕。丸底・球形の胴部に外反する短い口縁部。外面がハケである以外は器形は14に類似。底部に穿孔。19～21は高坏。前述の高坏に比べて坏部は深くあまり開かず、脚部も直線的に開く。20・21は丹塗り。22は須恵器の椀。内外面とも静止ナデ。底部側面はヘラで荒く削る。23～25は壺。23・24は底部も含めた球形の胴部に特徴ある同じ口縁部が付く。外面は丁寧なナデ後、24は丹塗り。25は肩から緩やかに膨らむ胴部に外反する口縁部。26は甕。胴部は中位から上位に向かって直線的に伸び、その端部が短くわずかに外反。底部中央に円形の、またこれを取り巻くように4方向にそらまめ型の穿孔。内面にケズリ痕。

### 土器②（住居・土壇出土）（挿図 第10図、図版5）

27・28は甕。27は短く厚い口縁部。28の口縁部はわずかに弧を描いて外反し、その端部を摘み出す。ともに外面ハケ、内面ケズリ。29は小型の壺。縦長球形の胴部にあまり開かない薄い口縁部。30は椀。内外面とも良く磨かれ黒色で、口縁部端部は外へ摘み出す。31は高坏の脚部。中位からさらに大きく開く。32は埴。底部ほど厚く、中位に強い張り。33・34は椀。33は半球形の体部で口縁部端部は外へ摘み出す。34は底部から口縁部端部まで内彎する体部。35は甕。須恵器ではないが器形は整い作りは丁寧。36は壺もしくは胴張の甕。凸レンズ状の底部で全体的に器厚は均一だがやや厚く、歪む。37は椀。丸みを帯びた平底で、口縁部端部の処理も含めて器形は30に類似するが、やや扁平。内外面ともに平滑に仕上げる。38は高坏。坏底部から直線的に大きく開く脚部。39は須恵器の坏蓋。やや丸みを帯びた深く平らな天井部に直線的に真下にのびる口辺部が付く、その境目に段。40・41は壺。中位の張る胴部。41は外面を丁寧に磨く。



第9図 土器実測図①(住居・土壇出土)

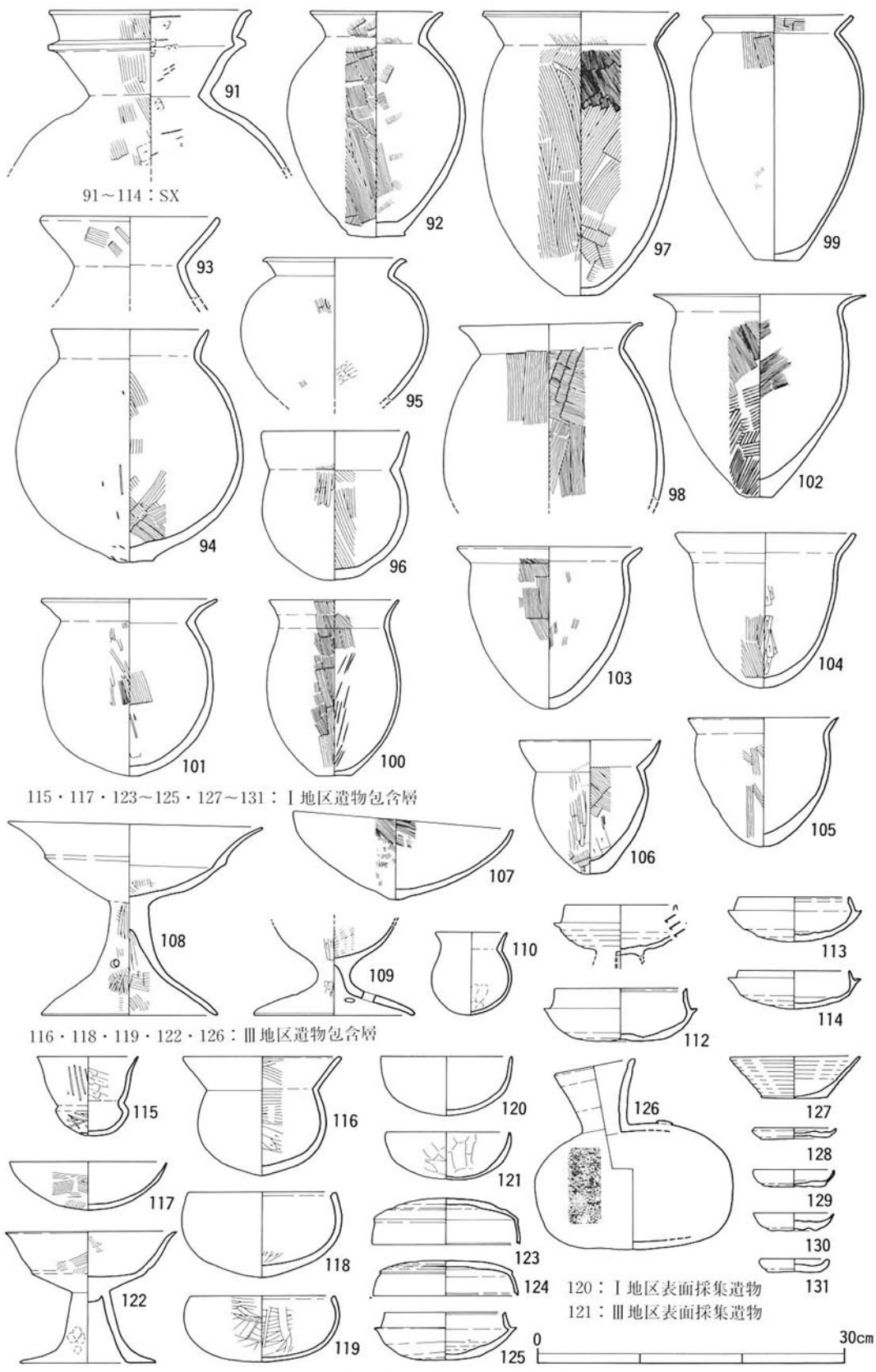


第10図 土器実測図②(住居・土城出土)

42は高坏の坏部。口縁部がわずかに外反。19～21に類似するが全体的に丸み。43・44は甕。ともに丸底・球形の胴部に短い口縁部。43は底部に穿孔。ともに外面を丁寧に磨く。45は須恵器の坏蓋。平らな天井部にわずかに外反する口辺部。その境目に突出する稜。46～49は甕。46は中位が弱く張る胴部にくの字形に大きく外反するやや長い口縁部。内外面ともハケ。47は肩がわずかに張る胴部にくの字形に外反する口縁部。48・49はともに頸部で弧を描いて外反する口縁部。48は外面ハケ。内面はケズリ。49も内面はケズリだが外面は丁寧に磨いてある。50・51は椀。50は丸底から口縁端部まで強く内彎する体部。51は厚めで半球形の体部。52～54は須恵器の坏蓋。高く丸みを帯びた天井部にやや外開きの口辺部が付き、その境に明瞭な段もしくは稜。55～59は須恵器の坏身。55・56は丸底、57～59は丸みを帯びた底部に内傾する口辺部。59の内傾する口辺部は中位で折れるように曲がり、ほぼその端部は上を向く。60は須恵器の坏身。丸底で口辺部は59に類似。61は甕。胴部は小型で口頸部は基部がやや太く、あまり開かず長くのびて開く。体部のほぼ中位に斜めに刺突文を施した凸帯状の帯が巡り、斜め上向きに穿孔。底部は厚い。62・65・66・68・69は焼成が不良で、工具による稜もない。62は須恵器の坏蓋。かなり深く丸みを帯びた天井部にやや開きの口辺部がつくが、境目に稜はない。64は須恵器の蓋。端部はくびれ、つまみは欠損。65は須恵器の高台付の坏。66は須恵器の坏。67は不明。68・69は須恵器の坏身。70は土師器の皿。71は須恵器の皿。焼成が不良。70・71ともにその体部は外反。72～85は土師器の坏。すべて輪積整形で内外面とも回転ナデ。底部は72が高台付き、73～75が丸みを帯びたわずかに厚めの歪んだ底部で、体部はほぼ直線的に開く。76～78が平底で体部は直線かあるいはわずかに外反。79は耳坏。80～83は高台型の厚い底部。84・85は平底ではあるがやや深く、体部はわずかに外反。86・87は小皿。88は盤。89・90は須恵器の坏。径が大きく平底で、やや内彎する体部の端部に受けのための段。

### 土器③（遺構外遺物）（挿図 第11図、図版6）

91～95は壺。91は拡張部が外傾しさらに面を持つ端部が外反。92は内外面ともハケ。平底に倒卵形の胴部。くの字形に外反する口縁部。93は壺の口縁部。頸部で折れて、面を持つ端部へ直線的に長くのびる。94は平底・球形の胴部にやや短めの直立気味の口縁部。外面はナデ、内面はハケ。95は肩から大きく張り出す偏球形の胴部に外反する短い口縁部。口縁端部を摘み出す。96は罎。丸底・球形の胴部にやや袋状の長い口縁部。97～106は甕。外面はほとんどハケ。内面ハケも多い。101・106はその後ミガキ、102は胴部下位から底部にかけてタタキ。97～100は口縁端部径が胴部最大径と同程度かそれより小さい胴の張る甕で、小さな平底と長く緩やかに膨らむ倒卵形の胴部に面を持ち外反する口縁部。101は丸底・球形の胴部にくの字形に大きく外反する口縁部。102～106は口縁端部径が胴部最大径より大きい。頸部からすぐの肩の部分が張り、小さい底部や丸底へ直線的に繋がる。102は平底で水平近くまで大きく開く口縁部。103～106は直線もしくは内彎する口縁部。102・103・106は内面ハケ。104はケズリ。105はミガキ。107は椀。底部は痕跡程度で半球形の体部。108は高坏。7に類似。109は高坏。108のそ



第11図 土器実測図③ (遺構外遺物)



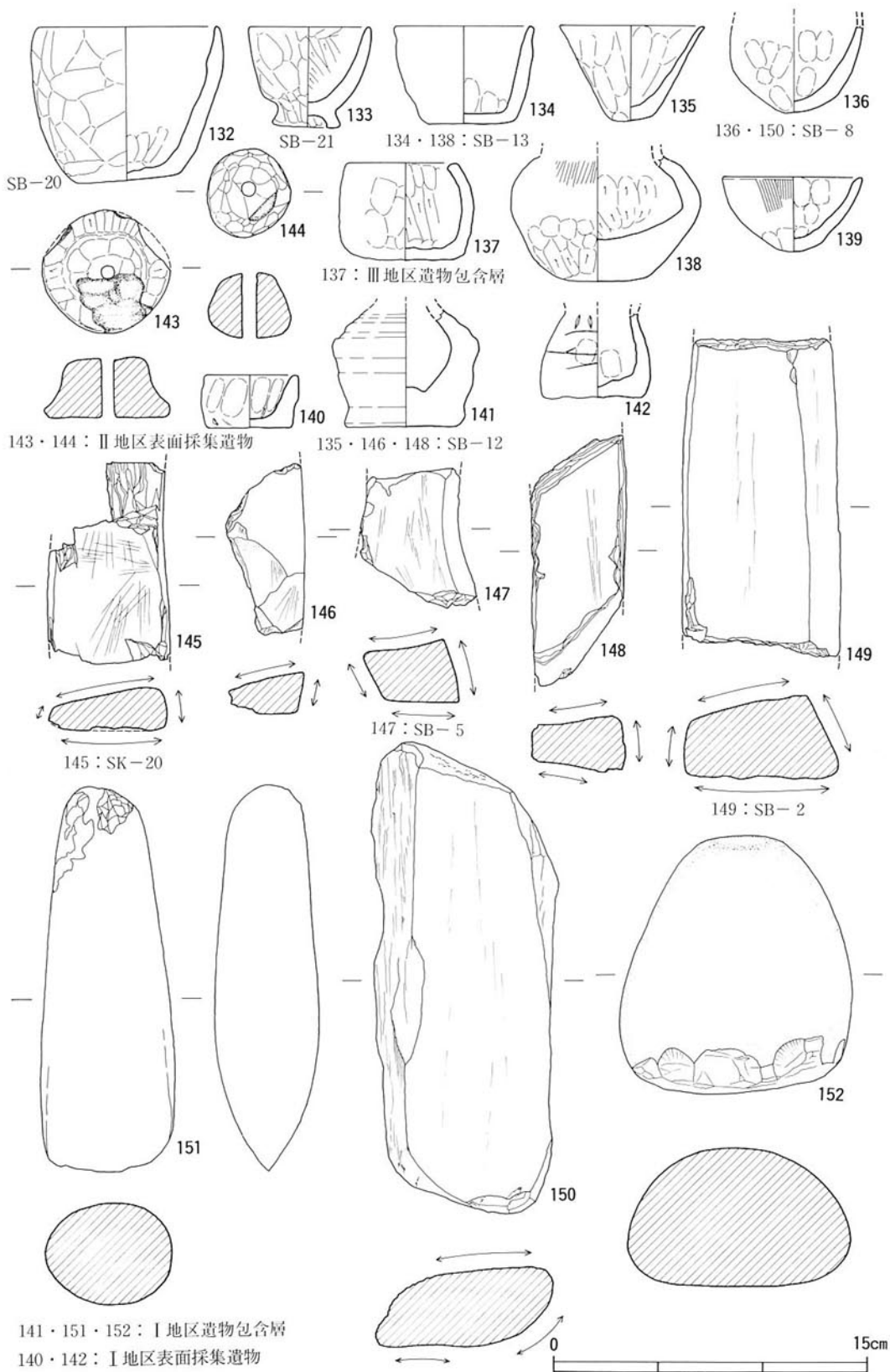
れを $\frac{1}{2}$ に縮めたような脚部で、水平近くまで大きく広がる部分に、穿孔。110は小型の甕。球形の胴部にあまり開かない直線的な口縁部。111は須恵器の高坏。スリット状の透かしが4方向に入る。112～114は須恵器の坏身。112は丸みを帯びた底部に内傾する口辺部。113・114は浅い丸底に内傾する口辺部。115は罎。極端に小さな体部と長大な口縁部。116は鉢。尖り気味の底部と偏球形の体部に長く直線的な口縁部。117～121は椀。117・120・121は半球形の体部。118・119は底部から口縁端部まで内彎する体部。119はやや扁平。122は高坏。深く全体的に丸みを帯びた坏部で端部がわずかに外反。裾部付近で急激に開く脚部。123・124は坏蓋。丸底気味の天井部にやや内彎する口辺部が付きその境目に段。125は坏身。丸底でやや反り気味の内傾する口辺部。126は平瓶。外面上部に2個の円形浮文を貼る。127は土師器の坏。内面が内彎する平底に直線的にのびる体部。128～131は土師器の小皿。

#### 土製品・石製品（挿図 第12図、図版7）

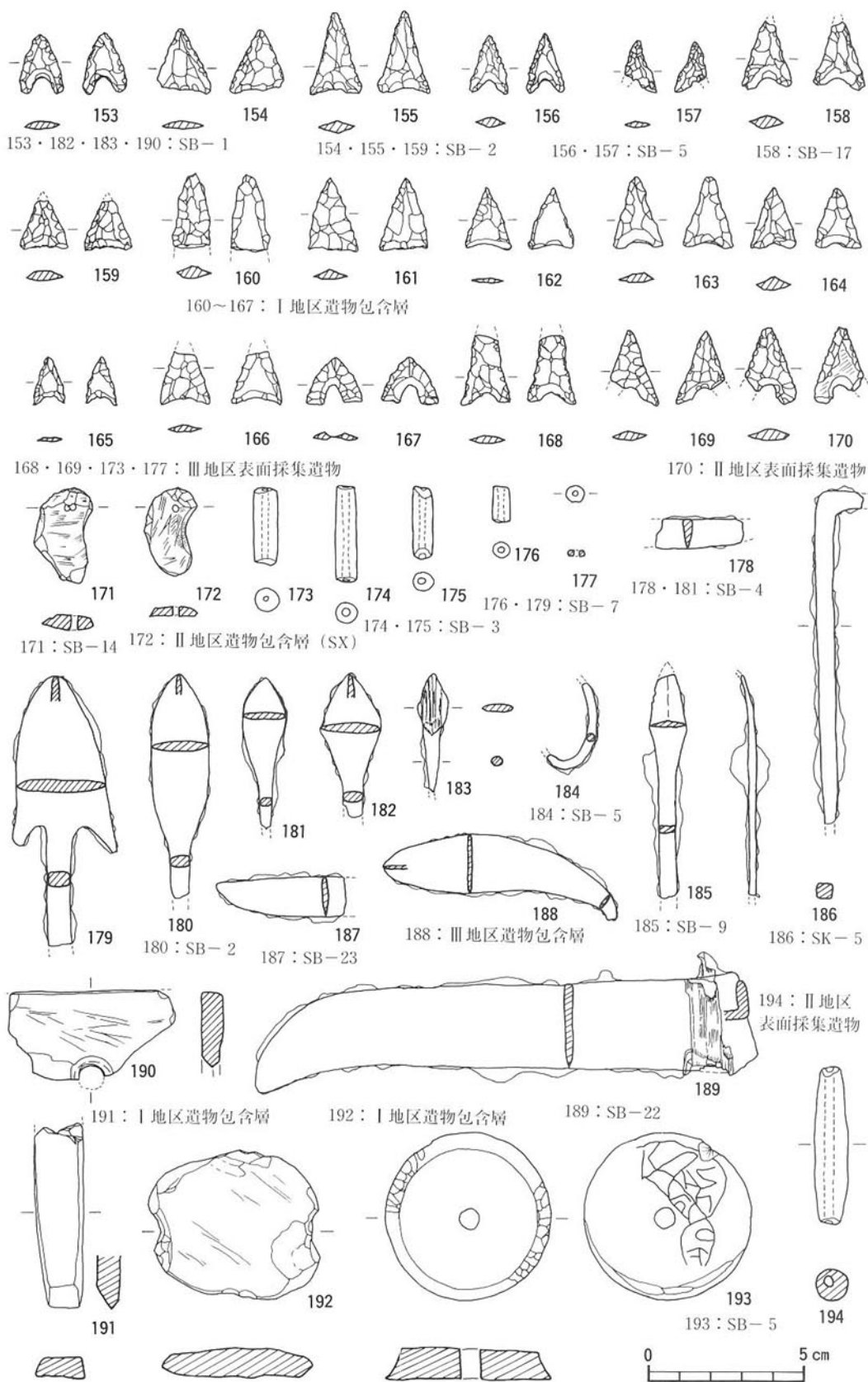
132～142は手捏ね土器。138は丹塗りの罎。142は胴部にほぼ周回する線が何本か任意に描かれている。142・143は土製紡錘車。144～150は砥石（中砥～仕上げ砥）。どの砥石も147ほどではないにしても使い込まれている。145・148～150は泥質片岩製。146は泥岩製。147は花崗斑岩製。151は磨製石斧。塩基性片岩製。152はタタキ（スリ）石。ひん岩製で両端に使用痕。

#### 石製品・鉄製品（挿図 第13図、図版8）

153～170は打製石斧。154・159・160・161が平基かまたは不明である以外は凹基無茎式である。平面形は154・159・167が正三角形に近い以外は二等辺三角形。167・169は姫島産黒曜石製、153はチャート製でこれら以外は泥岩製。167は側辺が彎曲し鎌身の大部分が太い逆刺。剝離面が整っていて作りが丁寧。比較的鎬が通っているのは155・161・164・169・172。153・156・157・169・170は腸挟が深く側辺がそのまま伸びて逆刺となる。158・165・168は腸挟も浅く逆刺も短い。155・162・163・164・166は基辺がわずかに凹む程度。171・172は石製勾玉。ともに塩基性片岩製でそろまめ型の扁平な石片に穿孔を施す。171は穿孔が二重。作りは粗雑ではあるがそれらしい形に仕上げている。173は土製管玉。丁寧な整形。174～176は石製管玉。174・175はともに塩基性片岩製で同時出土であるが、175は両端がかなり摩耗している。176は凝灰岩製。177は小玉。そろばん玉状に加工。178は鉄製刀子の刃部。179～182は鉄鎌。179は腸挟が深く鋭角の逆刺がのびる柳葉型。180は逆刺のない柳葉型。181・182は菱形。182は木質が鎌先に付着している。183は釣り針状の鉄器である。184は鉈。刃と茎とがはっきり区別できる。185は釘。186は鉄製刀子の切先。187・188は鉄鎌。188はL字型に曲げた基部に木質が残る。189は石鎌。泥岩製で紐を通すための穿孔がある。190は柱状両刃石斧（石ノミ）。泥質片岩製。191は石錘。塩基性片岩製で両端に凹み。192は石製紡錘車。塩基性片岩製で形も整い丁寧に仕上げられている。裏面には四本足の動物を模したと思われる線刻画が描かれている。動物の種類は特定できないが、背には鞍らしきものがかけられ飾りが付けられている。曲げた前足が動きを表す。193は管状土錘。作りは粗雑であるが堅く焼きしめられている。



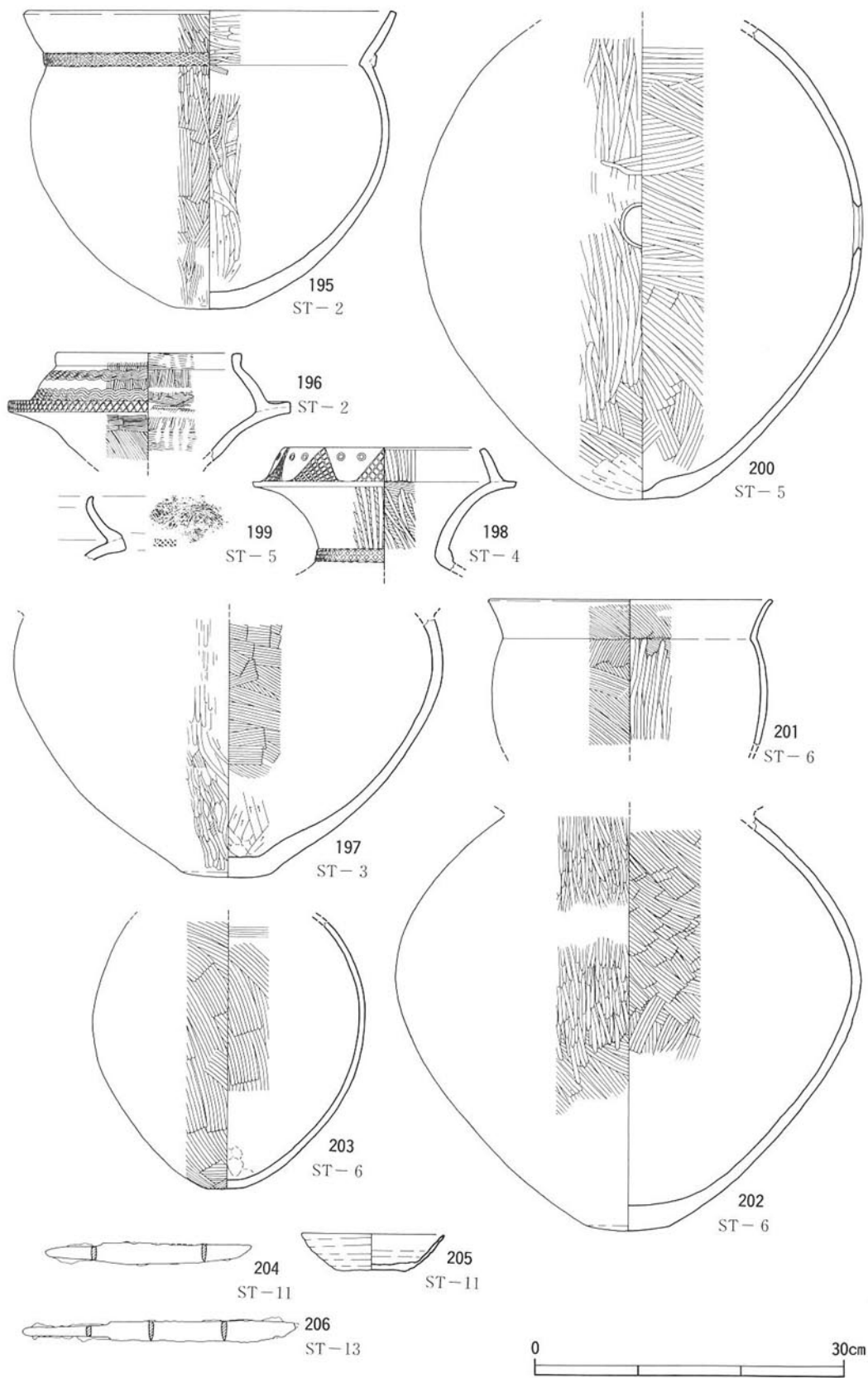
第12图 土製品・石製品実測図



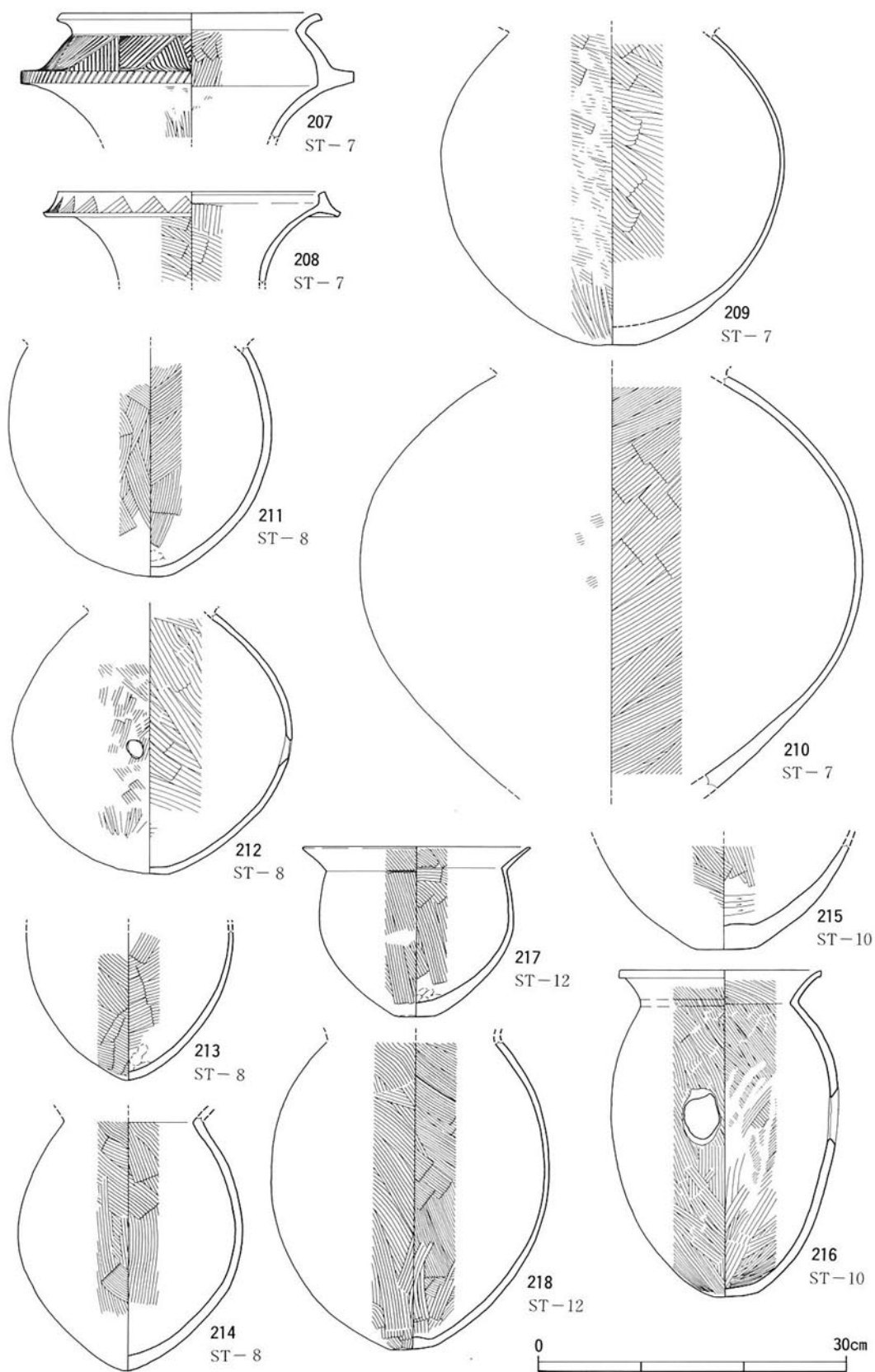
第13图 石製品・鉄製品実測図

埋葬遺構出土遺物（挿図 第14・15図、図版9・10）

194は甕（棺蓋）。器形は鉢型。凸レンズ状の底部、上位が張る偏球形の胴部、内外に稜を持つ頸部、わずかに内彎し端部に面を持つあまり開かない口縁部。内外面ともハケ後ミガキ。頸部外面に斜格子文を刻んだ凸帯を貼る。195は壺の複合口縁部。口縁部は朝顔型に開き端部に面。拡張部は内彎しながら内傾し、その面を持つ端部は上向きに折れ真上を向く。外面はハケ。口縁端部に斜格子文、拡張部に二段の櫛猫波状文。内面はハケ後部分的にミガキ。196は甕（棺身）。器形的には鉢に近い。凸レンズ状の底部、肩がわずかに張る胴部。下位はあまり膨らまず、底部との境はわずかにくびれる。外面はハケ後ミガキ・内面はハケ。197は壺の複合口縁部。形態的には195に類似するが拡張部の端部はそのままのびて内傾する面を持つ端部に至る。内外面ともハケ後ミガキ。頸部に斜格子文を刻んだ凸帯。拡張部に斜格子で埋めた鋸歯文とその間に2個の竹管文。198は壺の複合口縁部。拡張部が外彎する以外は基本的には195に類似。拡張部の外面に特殊な文様を描く。199は壺（棺身）。凸レンズ状の底部。ほぼ中位が張り、全体的に膨らんだ幅広の倒卵形の胴部。外面はハケ後ミガキ・内面はハケ。200は甕（棺蓋）。上位が弱く張る胴部はその最大径が口縁端部径とほぼ同じ。くの字形に外反するがほとんど開かない口縁部。外面はハケ・内面はハケ後ミガキ。201は壺（棺身）。凸レンズ状の底部。ほぼ中位が強く張るかなり幅広の倒卵形。外面はハケ後ミガキ。202は甕（棺蓋の枕）。痕跡程度の凸レンズ状の底部。199ほどではないが全体的に膨らんだ倒卵形の胴部。内外面とも太くはっきりしたハケ。203は鉄刀子（副葬品）。刃部は13.7cmで切先へ行くほどやや細くなる。204は土師器の坏。体部はわずかに内彎気味。底部外面は糸切り。内外ともに回転ナデ。205は鉄刀子（副葬品）。刃部は18.0cmで切先へ行くほどやや太くなる。206は壺（209）の複合口縁部。大きく外反する口縁部から内彎する拡張部が内傾しその端部は再び弧を描いて外反し、面を持つ端部に至る。内外面ともハケ後ミガキ。口縁端部の面上に斜めの刻み目・拡張部に斜線で埋めた鋸歯文を隙間なく互い違いに配している。207は壺（208）の複合口縁部。大きく外反する口縁部の端部に広い面を作り、その面上に斜線で埋めた鋸歯文を並べている。内外面ハケ。208は壺（棺蓋）。痕跡程度の底部に球形の胴部。外面はハケ後ミガキ、内面はハケ。209は壺（棺身）。ほぼ中位が強く大きく張る胴部。外面はハケ後ミガキ、内面はハケ。210は甕（棺蓋）。ほぼ丸底に球形の胴部。内外面ともハケ。211は壺（棺身の枕）。丸底に球形の胴部。内外面ともハケ。212は甕（棺蓋）。尖り気味の底部に緩やかに膨らむ胴部。内外面ともハケ。213は甕。ST-8の継ぎ目を塞ぐために使用。尖り気味の底部に中位を中心に緩やかに膨らむ胴部。内外面ともハケ。214は壺（棺蓋）。厚くわずかに凸レンズ状の底部。内外面ともハケ。215は甕（棺身）。わずかに凸レンズ状の底部。やや縦長ではあるが中位よりやや上を中心に全体的に緩やかに膨らむ胴部。外面はハケ、内面はハケ後一部ミガキ。216は甕（棺蓋）。器形的には鉢に類似。厚くわずかに凸レンズ状の底部。中位を中心に緩やかに膨らむ胴部。頸部の内外に稜を持ち、口縁部は直線的に開く。内外面ともハケ。217は甕（棺身）。わずかに凸レンズ状の底部。中位を中心に全体的に緩やかに膨らむ胴部。内外面ともハケ。



第14図 埋葬遺構出土遺物実測図①



第15図 埋葬遺構出土遺物実測図②



## V. まとめ

**成果の概要** 調査面積は約5600m<sup>2</sup>。発見された遺構は円形竪穴住居2軒・方形竪穴住居11軒・掘立柱建物1棟（9本柱）・土壙39基・壺甕棺墓11基・中世墓2基・不明遺構・溝状遺構（数条）・柱穴（多数）である。出土した主な遺物は、土器類としては弥生土器・土師器・須恵器・瓦質土器・陶器・磁器・手捏ね土器・土製紡錘車・土玉・管状土錘・土製管玉・石器類としては石鎌・石斧・石錘・石鎌・砥石・タタキ石・石製紡錘車・石製勾玉・石製管玉・石製小玉。鉄器類としては鉄鎌・鉄刀子・鉋・釘・鉄鎌・釣り針状鉄器、木器類としては矢板・棺材（一部）がある。この他、鉄滓・鞆の羽口片・銅銭・鏡片等がある。この調査範囲での時期は、弥生時代後期頃から10世紀頃までとなるが、これ以前の時期についても土器片が発見され、これ以降の時期についても人々が住んでいた記録が残っており、この地域は断続的ではあるが長く集落地として利用された可能性が極めて高い。

**住居** SB-1は直径が約10mもあり、主柱穴12本が計測したかのように整然と並べられており、また多量の木材（柱・梁）や屋根材（茅）が炭化して床面を被っていた。方形住居の規模は一辺が4～5mで、主として4本柱である。ほぼすべての住居でカマド跡と思われる焼土塊が発見されたが支えとなる石や側石あるいは煙道があり、残りの良いのはSB-20のものだけである。SB-18・21では多くの土器片がくずれたカマド中から出土した。

**土壙** 深く大きなものはほとんどない。SB-2・20はかなり浅いが、共通して多量の土師器（特に坏）を出土した。時期は9・10世紀頃である。SK-28は高坏（丹塗りを含む）が多いが、方形周溝墓の溝からの同様な出土例もあるように、何らかの祭祀関係遺構の可能性が大きい。時期は5世紀の中～後期である。SK-17も祭祀構（墓）の可能性がある。

**埋葬遺構** 壺・甕棺墓群は弥生時代終末期頃のものである。長軸方向の方位に共通性はないが、棺身に棺蓋を被せ、棺蓋を高くし棺を斜めに設置するところは共通している。中にはST-8のように棺蓋の支えに甕を使うだけでなく合わせ目も一個体分の土器片で塞ぐ丁寧なものもある。また、複合口縁部の様々な文様も、概して他から出土するものに比べて丁寧に描かれており、埋葬するにあたっての被葬者の思いが感じられる。なお、高地性集落「清水遺跡」における山頂の5基の壺棺墓群のように墓域として設定されていた可能性がある。中世墓は副葬してあった銅銭の銹化が著しく、また癒着しており年代を知る手掛かりは得られなかった。

**不明“遺構”** II地区の北側、縦横20m以上の範囲で不定形に広がる黒色粘質の泥土層を主とする落ち込みまたは凹地で、多量（トレンチからの出土量は遺跡全体の2～3割）の完形に近い土器片を出土した。形状・範囲等からみて、池や沼のようなものではと思われるが、住居等とその年代はほぼ一致し祭祀に関係する遺構の可能性も否定できない。

**溝状遺構** III地区で発見されたが、その灰色の埋土中より出土した種々雑多な土器片は摩滅し、

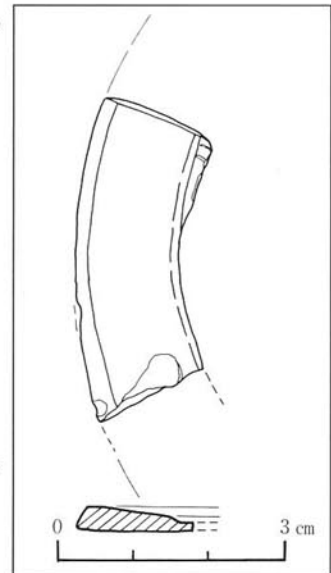
かなり新しい遺構であることがわかる。具体的な時期は不明である。

**出土遺物** 計測した出土遺物は218点である。弥生時代から平安時代までの遺物で、在地の土器に東から新たな形の土器が流入したり、また須恵器等のまったく異なる土器が加わる等、その変化を時間軸に沿って見るができるほど種類も数も豊富である。

**集落** 竪穴住居のうち最も古いのがSB-1・9、続いてSB-5・8であり、さらに壺棺墓群も含めて、弥生時代後期から終末期にあたる。なお昨年度発掘した四割遺跡も弥生時代後期頃である。古墳前期にかけてはSB-14・15が建てられている。つまり、島田川の南側一帯では島田川と四割川とが合流する、玖西盆地の方角を見通す位置にまず集落が作られたとみることができる。以後、全体的にⅠ・Ⅱ地区からⅡ・Ⅲ地区へ（北から東へ）と移っているようである。この頃から遺物には須恵器が含まれるようになり、確実に古墳時代へと入っていく。Ⅲ地区でみてみると、遺物の時期差・切り合い関係・カマドの向き・住居間の距離を考慮するとほぼ同時期に存在できそうな住居はSB-23・18・20、続いてSB-21・19、少し遅れてSB-22となるようである。6世紀の終わりから7世紀初頭くらいまで竪穴住居の時期である。土壌で見ると、掘立柱建物が主流になってからもほぼ10世紀頃まで続くようである。しかし、延喜8年（908年）の玖珂町から祖生までの戸籍には339人の記述もあり、以後も永く人々が住み続けていたことがうかがえる。なお、昨年度の発掘の際に、SB-1が建てられる以前の、縄文土器片や弥生時代前期末の甕の口縁部片の混入もみられ、また製塩土器片・瓦器片・緑釉陶器などの政府の役所等を暗示するような遺物もあり、奥まった地域ではあるものの長期的かつ確かな集落の存在を裏付けている。

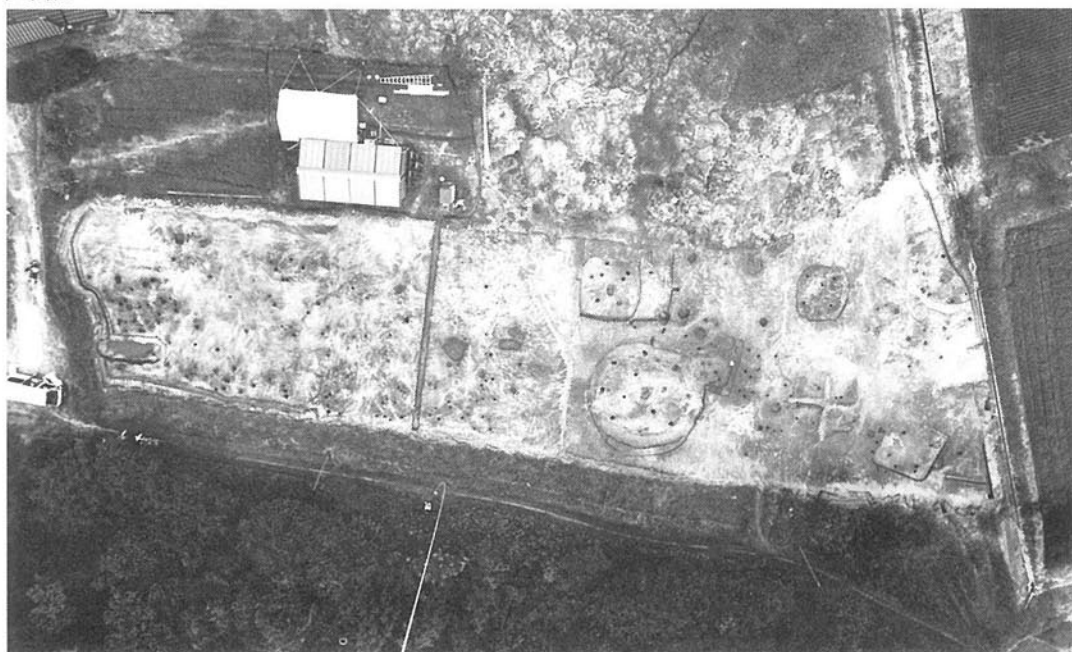
最後に鏡片について若干の説明を加えて締めくくりとしたい。

鏡片（218）は、Ⅰ地区のSB-1の覆土上層から出土した。素緑の縁部片で、一部に外帯の櫛歯文が認められる。復元径11.4cmを測る。鏡片の縁部の一方端と外帯に接する部分には磨研などの加工の痕跡が認められ、縁部のもう一端のみが折れ口をそのまま残す。一部だけ未加工部分を残した本資料が鏡片加工品としての完成品であったものか、あるいは研磨された端部が折損したものかを知ることはできないが、後者の可能性が高い。さらに推論すればその部分に穿孔があった可能性もある。鏡片そのものは、黒灰色を呈し銅質は良く舶載鏡と考えられる。残存部分から鏡種を判断することは非常に困難ではあるが、素緑であることやその形状、出土遺構の時期等を考慮すれば、長宜子孫系の内行花文鏡になるものと思われる。（村岡和雄）



第16図 鏡片実測図

図版 1



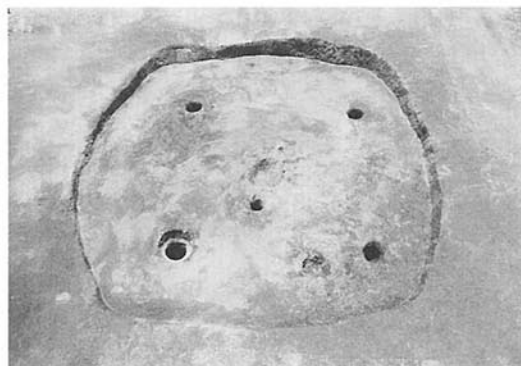
I地区完掘



III地区完掘



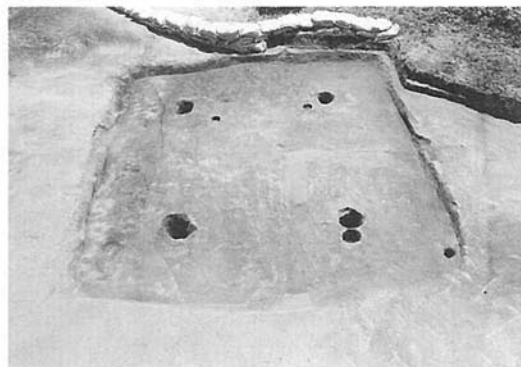
竪穴住居 (SB-1) 炭化木材・土器出土状況



竪穴住居 (SB-5) 完掘



竪穴住居 (SB-9) 炭化木材・土器出土状況



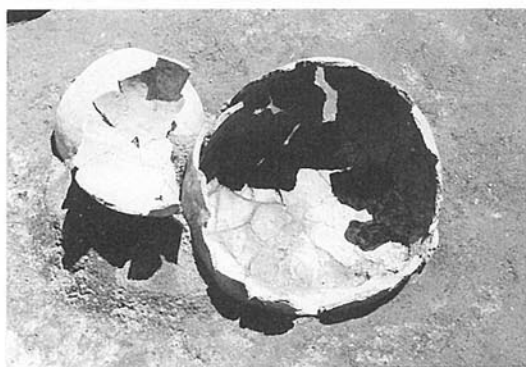
竪穴住居 (SB-13) 完掘



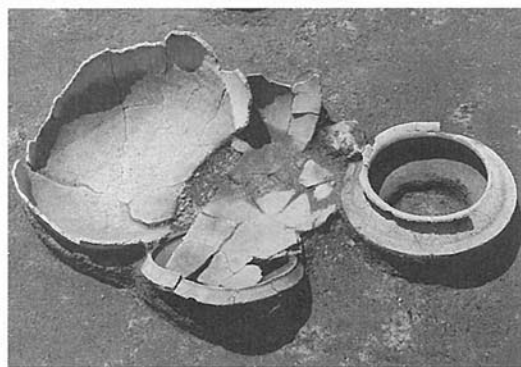
竪穴住居 (SB-20) 土器出土状況



竪穴住居 (SB-21) 土器出土状況



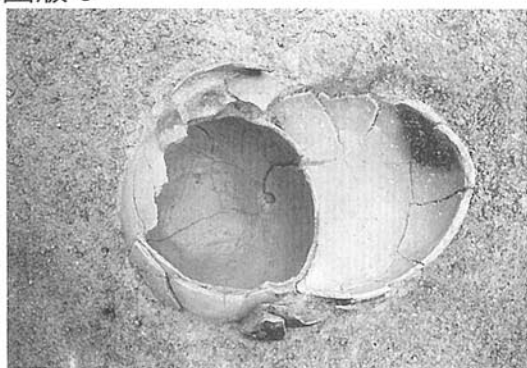
壺・甕棺墓 (ST-6) 出土状況



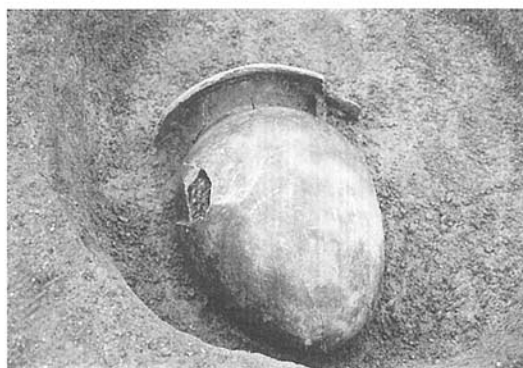
壺・甕棺墓 (ST-7) 出土状況



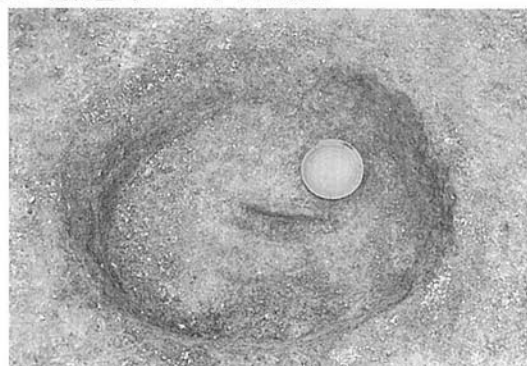
図版 3



壺・甕棺墓 (ST-8) 出土状況



壺・甕棺墓 (ST-10) 出土状況



中世墓 (ST-11) 遺物出土状況



壺・甕棺墓 (ST-12) 出土状況



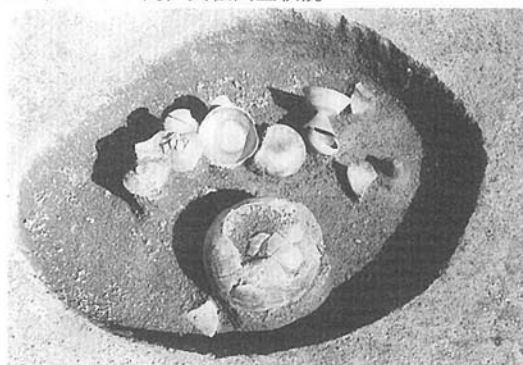
SX (トレンチ内) 土器出土状況



SX (トレンチ内) 矢板出土状況



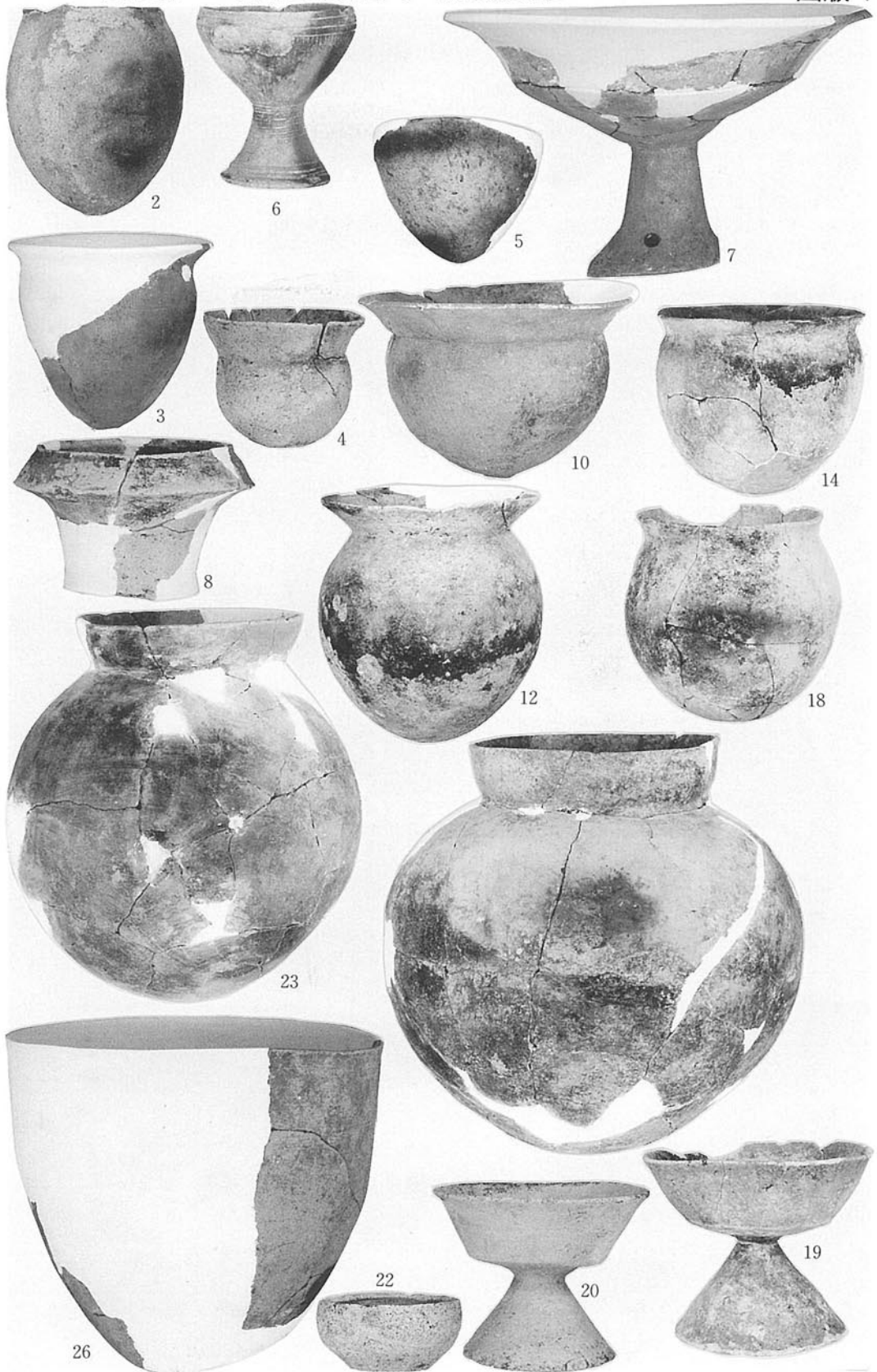
竪穴住居 (SB-13) 土器出土状況 (部分)



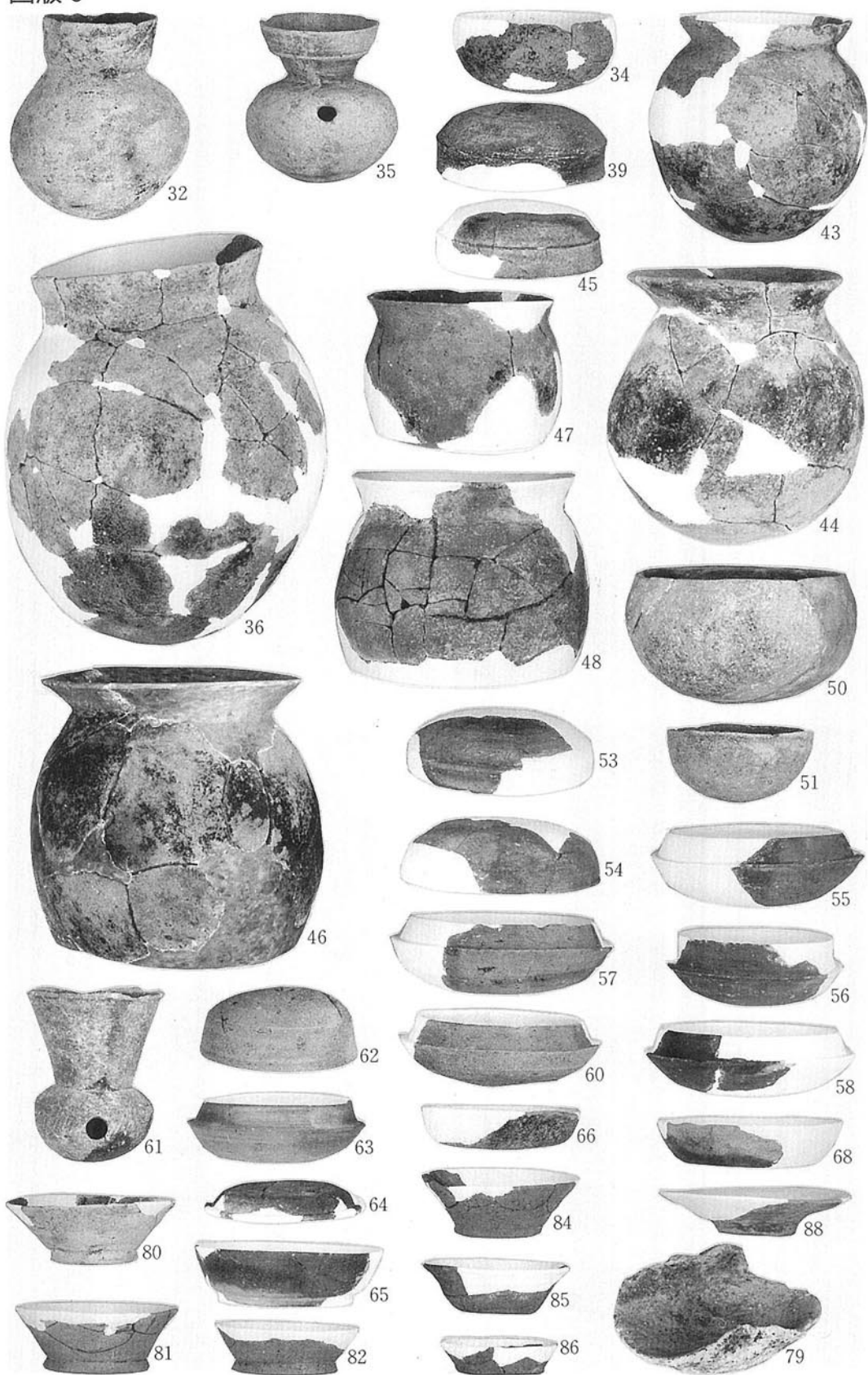
SK-28 土器出土状況

出土遺構については挿図（実測図）9～15を参照のこと

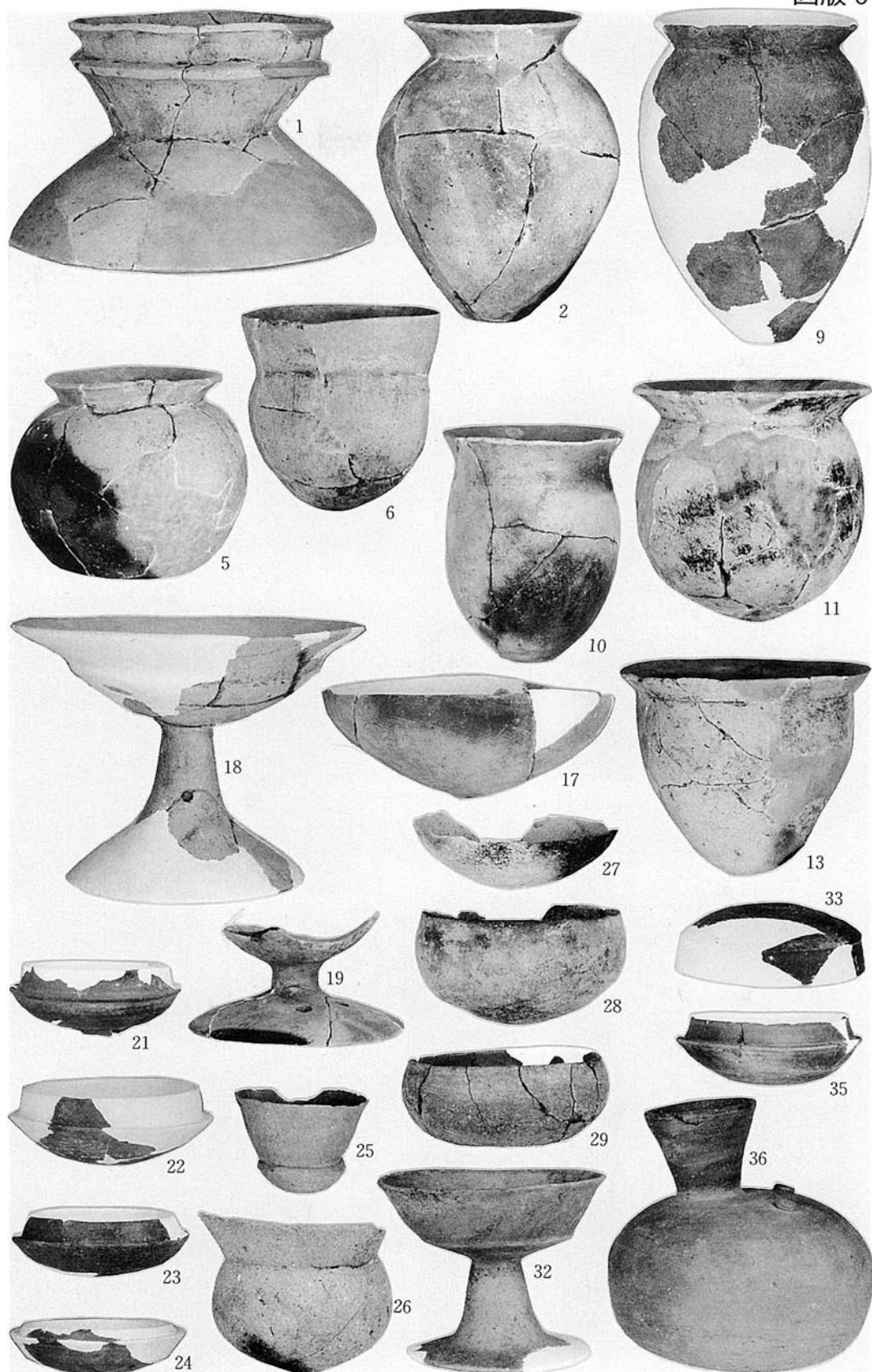
図版 4



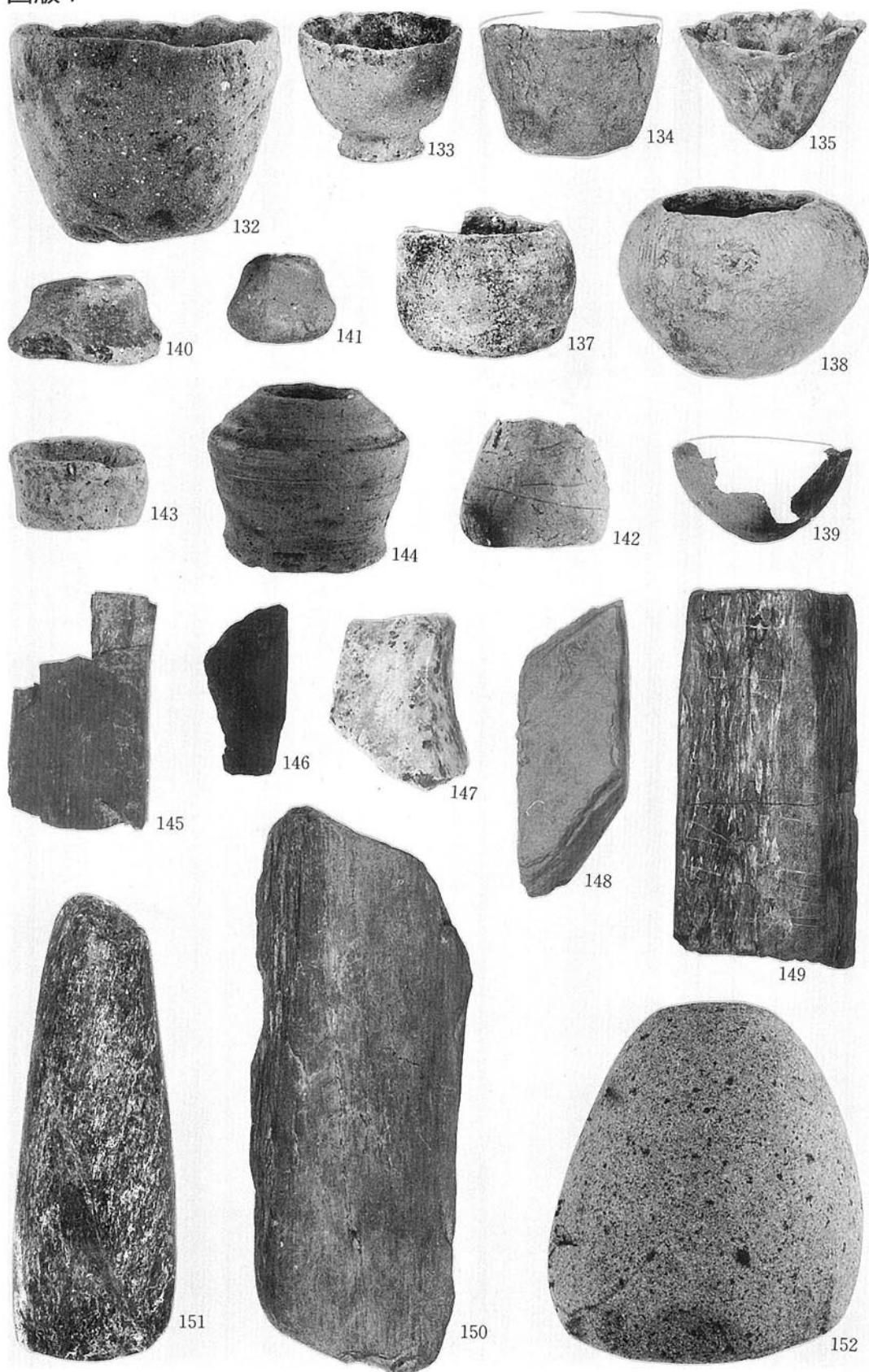
図版 5

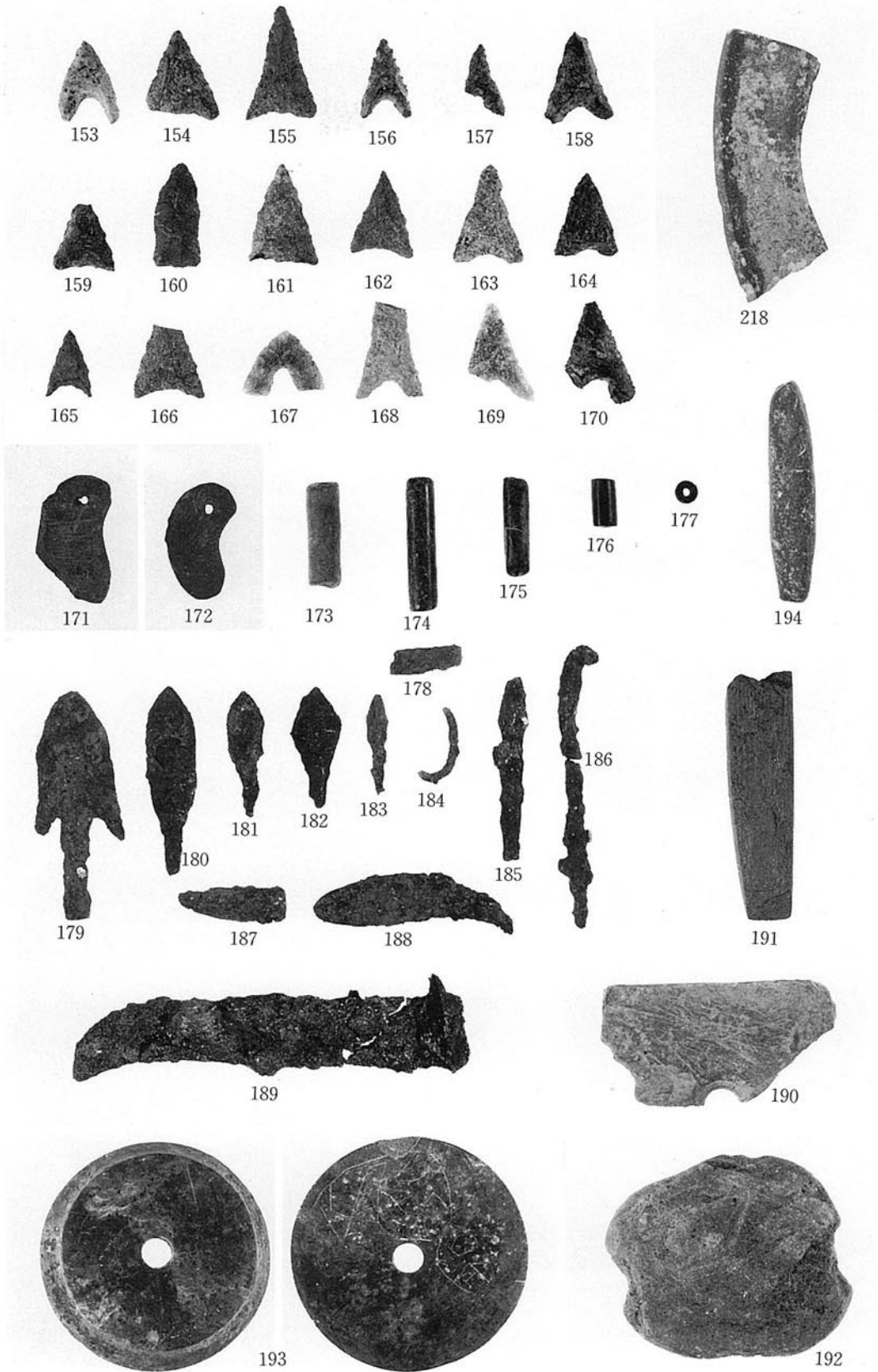




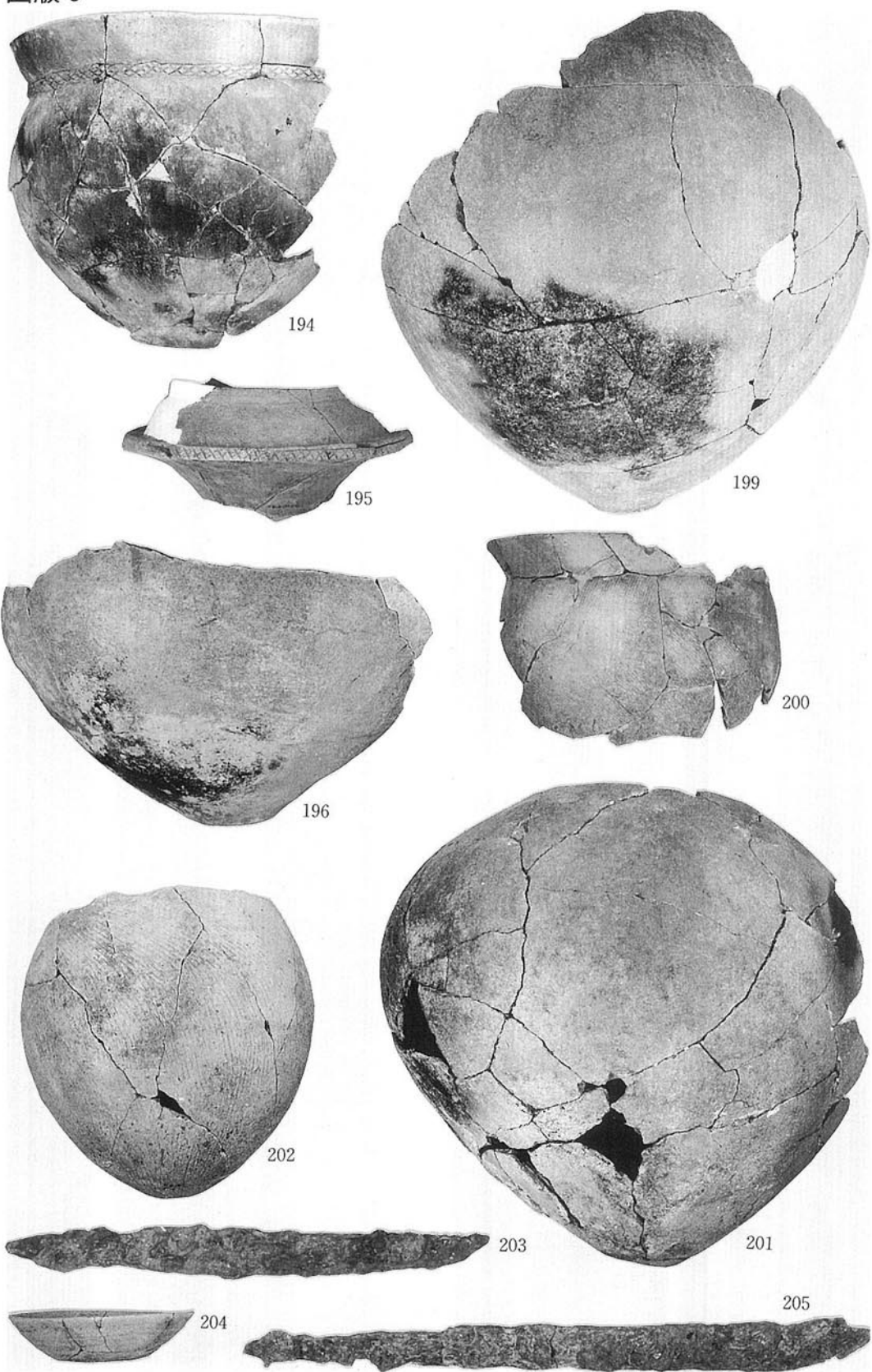


图版 7

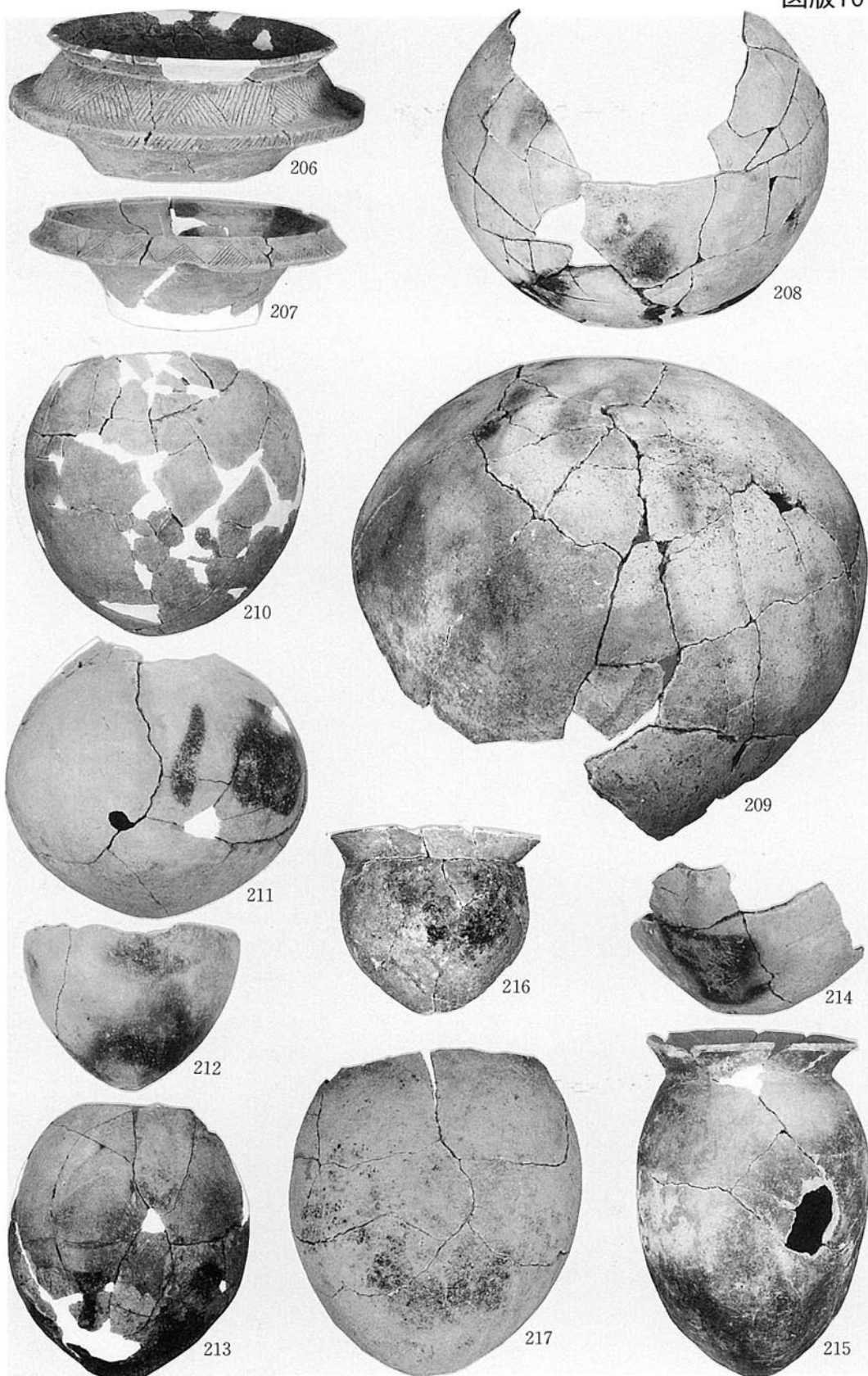




图版 9







---

山口県埋蔵文化財調査報告第150集

奥ヶ原遺跡

平成3年度県営圃場整備  
事業に伴う発掘調査報告

平成4年3月

編集 財団法人山口県教育財団  
(山口市大手町2130)  
山口県教育委員会文化課  
(山口市滝町1-1)  
山口県埋蔵文化財センター  
(山口市春日町3-22)  
発行 財団法人山口県教育財団  
(山口市大手町2130)  
山口県教育委員会  
(山口市滝町1-1)  
印刷 瞬報社写真印刷株式会社  
(下関市長府扇町9-50)

---